2025年度

地域の課題解決事業
成果報告書

「高度人材育成」「地域活性化」をオール大分で取り組む

Oita Regional Cooperation Platform

おおいた地域連携プラットフォーム

おおいた地域連携プラットフォームは、
産学官が協働（オール大分）で
大分県の人的資産（地域資産）の最大化と
有効活用を図ります。

目　次

1. ごあいさつ
2. 2025年度実施事業一覧
6. 大分県と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業の成果
9. 県内市町村と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業の成果
14. 県内企業等と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業の成果
22. フィールドワークを通じての地域課題解決事業（フィールドワーク支援事業）の成果
44. 2025年度地域の課題解決事業成果報告会
45. フィールドワーク支援事業のひとこま
46. フィールドワーク支援事業　参加学生等アンケート
48. 県内大学・短期大学等一覧

ごあいさつ

おおいた地域連携プラットフォーム
事業推進本部長
国立大学法人大分大学理事
大分大学地域連携プラットフォーム推進機構長

廣瀬　祐宏

おおいた地域連携プラットフォームは、大分大学が中心となり、県内の全高等教育機関、産業界、自治体等が連携し、地方創生に向けた恒常的な議論の場を運営するとともに、関連する事業を実施しています。令和３年度の設立から５年を迎え、産学官の各機関がそれぞれの強みを発揮し、相互に補完し合える取組へと発展してきました。少子高齢化・人口減少という地域の課題に対し、高等教育機関が主導的な役割を果たして、地域課題の解決、地域人材の育成、県内進学率と県内就職率の向上などに取り組んでいます。

特に、地域課題の解決では、今年度も多様な地域課題に対応するため、大分県や県内市町村から提案のあった個別具体的な課題について、県内高等教育機関がもつ研究シーズやシンクタンク機能とのマッチングを行い、地域課題解決の学官連携事業を推進しました。

また、指導教員のもとに学生が地域の現場に出向き、課題の解決に取り組む「フィールドワーク支援事業」では、県内高等教育機関から330名を超える多くの学生が参加しました。県内各地の実情に触れながら、課題解決に向けた提案や実践活動を行うことで、地域の中で学生が自ら考え行動する力を育むとともに、「おおいた」を愛する心を育み、次代を担う地域人材に成長することを願っています。

本報告書は、令和7年度のこうした地域課題解決事業の成果を分かりやすく取りまとめたものです。ここには、大分県との地域課題解決事業３件、市町村との地域課題解決事業９件、企業等との地域課題解決事業８件、学生のフィールドワークを通じた地域課題解決事業22件の事例を紹介していますので、本プラットフォームの取組についてご理解いただくとともに、参考にしていただければ幸いです。

地域課題の解決の他にも、本プラットフォームでは、地域人材育成のため、「おおいた共創士」の認証、県内就職率向上のため、学生と県内企業のマッチングを行う「シゴト発見フェスタ」の開催などに注力しています。さらに、文部科学省の「リカレント教育エコシステム構築支援事業」に３年連続で採択され、大分県域でリカレント教育を周知し講座を開講しました。

今後とも、高等教育機関が中心となって産学官の強固な連携基盤を活かし、「オールおおいた」で地方創生を力強く牽引していけるよう取り組んでまいります。

むすびに、令和7年度の事業実施にあたり、多大なるご協力、ご支援を賜りました地域の皆様、ならびに関係者の皆様に心より御礼申し上げます。また、本プラットフォームの活動に対し引き続きのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2025年度 実施事業一覧

大分県、県内市町村、企業等と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業

大分県、県内市町村、企業等との連携により、「地（知）の拠点」としての大学等（大学、短大、高専）が持つ研究開発機能やシンクタンク機能を活用し、教育や産業振興、医療・福祉の充実、地域活性化など多様な地域課題に対応する事業です。

大分県と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業

No.	大学名	代表者	事業名	実施地域	頁
1	大分大学	理工学部 教授　古家　賢一	AI活用型動画編集による観光地PRと地域活性化プログラム	大分県	6
2	日本文理大学	工学部 教授　吉村　充功	多世代交流による高齢者の社会参加促進を目指した地域活性化事業	大分県	7
3	立命館アジア太平洋大学	サステイナビリティ観光学部 教授　須藤　智徳	「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」の自然・地域資源の持続的な利用による地域振興	大分県	8

県内市町村と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業

No.	市町村名	大学等名	代表者	事業概要	頁
4	大分市	大分大学	教育マネジメント機構 STEAM教育推進センター 准教授　甲斐　耕司	**科学体験イベント実施事業** ・科学体験イベント「おおいたサイエンスパーク2025」の実施 ・大分大学から科学体験ブースを11ブース出展	－
5	中津市	別府溝部学園短期大学	食物栄養学科 准教授　江島　陽子	**青の洞門・本耶馬渓の観光振興** ・誘客に繋がる飲食レシピの開発、提案	9
		日本文理大学	工学部 教授　吉村　充功	**青の洞門・本耶馬渓の観光振興** ・観光客誘致に繋がるモノの開発、設置 （アウトドアサウナ、ジップラインを想定）	－
6	佐伯市	大分大学	理工学部 教授　古家　賢一	**佐伯市の城下町における地域資源の可視化に関するVR表現の可能性と地域連携の実践事業** ・城下町のVR映像撮影、編集 ・インバウンド誘客の営業資料として活用	10
7	竹田市	別府大学	文学部 准教授　福西　大輔	**城原八幡宮祭り保存事業** ・城原八幡社秋季大祭への参加（学生20名）による地域住民との交流 ・城原・宮城地区民俗調査報告書の作成 ・別府大学附属博物館企画展の実施 （パネル展「竹田の伝統文化を未来へ－城原八幡社秋季例大祭－」）	－
8		おおいた地域連携プラットフォーム	コーディネーター 和田　智雄	**移住定住動画作成プログラム事業 in 竹田市** ・移住定住者向け及び観光PR用に動画コンテンツを学生視点で作成	11

No.	市町村名	大学等名	代表者	事業概要	頁
9	杵築市	別府大学	文学部 准教授　福西　大輔	**民俗文化財調査事業** ・杵築市大田地域の旧未調査地区で調査実施 ・『杵築市大田地域民俗調査報告書2 ―旧田原村とその周辺の民俗―』の作成 ・地元住民に向けた調査報告会と調査報告書贈呈式の実施（大田庁舎）	―
10	由布市	大分大学	経済学部 准教授　松谷　葉子 地域連携プラットフォーム推進機構 コーディネーター　和田　智雄	**「アントレプレナーシップ教育」導入** ・由布高校生参加型の「由布市の未来をつくる講座」開催 ・大分大学の「利益共有型インターンシップ（地域）」として実施	12
11	日出町	立命館アジア太平洋大学	学生団体 「P&F NANTAN」	**南端地区ふるさと祭り支援** ・廃校となった旧南端小中学校にて多文化交流事業を展開中の学生による地元ふるさと祭りの開催援助	13
12	九重町	大分大学	福祉健康科学部 准教授　飯田　法子	**子育て講演会開催事業** ・子どもの発達と家庭環境に関する講演会の開催	―

県内企業等と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業

No.	大学等名	代表者	事業名	連携企業等	頁
13	大分大学	福祉健康科学部 講　師　齋藤　建児	子育て中の親の孤立予防に向けた相談・連携・参加体制の整備事業	一般社団法人 e-blossom	14
14	大分大学	医学部 准教授　平塚　孝宏	地域癌患者が自宅でできるElectric fieldを用いた癌治療機器開発	(株)デンケン	15
15	日本文理大学	工学部 准教授　原田　淳史	電力の地産地消　ゆのひら産の電気でEV車を走らせて交通課題解決へ！	ゆのひらんプロジェクト （湯平まちづくり協議会）	16
16	別府大学	国際経営学部 講　師　小野　貴史	AIアバター×観光地域×大学生によるデジタル地域創生プロジェクトin 道の駅ゆふいん	有限会社 ゆふいん道の駅	17
17	立命館アジア太平洋大学	戦略企画チーム 社会連携プロデューサー 塩見　剛	グリーンツーリズム魅力発信事業	NPO法人 安心院町グリーンツーリズム研究会	18
18	立命館アジア太平洋大学	サステナビリティ観光学部 教　授　上原　優子	多文化共生地域の未来ビジョン創出事業 ～技能実習生×APU×地域協働モデルの構築～	竹田商工会議所	19

No.	大学等名	代表者	事業名	連携企業等	頁
19	大分県立芸術文化短期大学	国際総合学科 講師　堤　亮介	大分市上野・古国府地区における文化遺産を活用した地域活性化・観光まちづくり推進事業	(株) 文化財保存活用研究所	20
20	大分工業高等専門学校	一般科 准教授　森田　昌孝	大分在来トウモロコシ「もちとうきび」を用いたコーンスプラウトの高品質安定生産	合同会社 Farm Sam	21

フィールドワークを通じての地域課題解決事業（フィールドワーク支援事業）

大学等の教員が企画し、学生と共に地域に直接出向き、地域課題等の解決を図る事業活動を通じて学生が地域課題に気づくこと、課題解決を図ることで地域に貢献すること、学生との交流を通じて地域が活性化すること、また、学生の地域への愛着を深めることをねらいとしています。

県内各地域においてバランスよく活動が展開されるよう、大分市・別府市以外の地域を対象とした「地域枠」(No.21 ～ 30)と大分市・別府市を含む県内全域を対象とした「自由枠」(No.31 ～ 42)を設けています。

No.	大学名	代表者	事業名	実施地域	頁
21	大分大学	経済学部 准教授　朝美　淑子	『セメントで攻めんと！－チル（Chill）な津久見の新たな観光フェーズ－』	津久見市	22
22	大分大学	福祉健康科学部 講師　安藤　敬子	みんなでつくる避難所での健康維持に関する“かるた”の作成と評価	日田市	23
23	日本文理大学	工学部 教授　池畑　義人	少子高齢化が進む地域における地域資源アーカイブ作成による再発見と未来への活用　～国東地区におけるアーカイブ資料作成活動による地域資源への理解の深化～	国東市安岐町（両子地区）	24
24	日本文理大学	工学部 教授　小島　康史	回天映像制作＆シンポジウムプロジェクト	日出町	25
25	日本文理大学	工学部 講師　濵田　大助	大分三大竹祭りからはじめるDX化	日田市 竹田市 臼杵市	26
26	別府大学	食物栄養科学部 教授　高松　伸枝	大分県下の飲食・宿泊事業者に向けた食物アレルギー対応推進事業	玖珠町 大分市	27
27	別府大学	食物栄養科学部 教授　陶山　明子	重光家住宅主屋の廃業味噌蔵からの蔵つき微生物の探索とその有効利用	国東市国見町	28
28	別府大学	食物栄養科学部 教授　陶山　明子	規格外トマトの有効利用－トマト酢の商品開発	竹田市	29
29	大分県立芸術文化短期大学	国際総合学科 講師　秋庭　淳志	インバウンドビジネスへの対応に向けた「昭和の町」国際化プロジェクト	豊後高田市	30

No.	大学名	代表者	事業名	実施地域	頁
30	大分県立芸術文化短期大学	国際総合学科 講師 堤 亮介	府内藩の名産品再興を通じた国東七島藺の持続可能な活用と伝統産業の活性化	国東市安岐町 （明治地区）	31
31	大分大学	医学部 教授 井上 亮	多文化共生防災ワークショップ：外国人住民とともに学び合う、災害時の健康と生活への備え	大分市	32
32	大分大学	理工学部 助教授 賀川 経夫	地域DX に向けた昼夜マッピングパーティによる地域課題の可視化レポートの作成	大分市	33
33	大分大学	教育学部 教授 市原 靖士	地域連携によるSTEAM教育ワークショップの指導者育成	大分市 日出町 国東市 津久見市	34
34	大分県立看護科学大学	看護学部 学内講師 篠原 彩	つながる健康・ひろがる共生―すこやかな多文化共生の地域づくり事業	豊後大野市	35
35	日本文理大学	工学部 准教授 松原 かおり	学生と描く臼杵の物語―観光映像を通じた地域共創プロジェクト	臼杵市	36
36	別府大学	国際経営学部 講師 小野 貴史	ガストロノミーツーリズムによる地域活性化とまちあるきガイド人材育成事業	別府市 大分市 由布市 杵築市 日出町	37
37	別府大学	国際経営学部 講師 小野 貴史	文化財保存・継承と教育旅行活用プロジェクト ～戦後80年に向けたピースツーリズム～	宇佐市・国東市・杵築市・別府市・大分市・津久見市・佐伯市・日出町・姫島村	38
38	別府大学	食物栄養科学部 教授 陶山 明子	大学生によるフィールドワークを通じた放置竹林対策と竹資源の利活用提案事業	杵築市山香町	39
39	立命館アジア太平洋大学	サステイナビリティ観光学部 教授 須藤 智徳	亀川商店街再活性化計画策定事業（V）	別府市 （亀川地区）	40
40	別府大学短期大学部	食物栄養科 教授 海陸 留美	大分県産原木乾しいたけの美味しさを子どもにつなぐ食育プロジェクト	大分県内全域	41
41	別府溝部学園短期大学	食物栄養学科 教授 牧 昌生	未利用果実を活用したふるさと納税返礼品の開発	別府市	42
42	別府溝部学園短期大学	食物栄養学科 教授 望月 美左子	世代間を結ぶ　若い世代が朝食をしっかり時短レシピ提案活動	別府市	43

AI活用型動画編集による観光地PRと地域活性化プログラム

大分大学／理工学部　教授　古家　賢一

令和7年度大分県地域課題解決支援事業
AI活用型動画編集による観光地PRと地域活性化プログラム

中津東高校
佐藤 新太郎（指導教員） 永田瑞也 右田京剛 信安大輝 中野優和 前田瑞志 池田悠月 八木優心 坂井雪乃 先尾美咲

大分大学 情メディア処理研究室
古家賢一（指導教員） 秋吉真吾 三吉歩夢 園福義博 山本龍史 吉田健人 木場佑生 木村将太 原知輝 日野陽斗 古田明日香
安信響 大庫義生 小野木実花 小出匠悟 中村咲絵 前田研伍

概要

- コロナ渦の終息で県外の観光客やインバウンドの外国人観光客が増加
→大分県の魅力をより多くの人に広めたい

先端技術を活用して様々な観光名所を知ってもらい、
大分県での滞在時間・消費額を増加させる

今年度の地域連携プロジェクト：

- 中津東高校の高校生と連携し、3つのプロジェクトを実施

VRによる中津の魅力発信プロジェクト

- VR動画で中津市の観光名所を発信する
VR(バーチャルリアリティ)：人間の感覚器官に働きかけ、現実ではないが実質的に現実のように感じられる環境を人工的に作り出す技術の総称

生成AI観光プロジェクト

- 生成AIを用いて、中津の歴史的な魅力を伝える動画を作成

からエネプロジェクト

- からあげの廃油をエネルギーとして活用して発電

中津市でのVR撮影

- 2025/11/29：中津市で高校生とVR撮影を実施

中津市役所の方に撮影場所の意見を伺い、撮影に同行していただいた

寺町

- 赤壁を撮影

中津城

中津市歴史博物館

中津東高校

- 中津東高校では4m視点で撮影

福澤諭吉旧居

中津東高校の生徒さんと
撮影することができました！

撮影したVR動画は
QRから！

VR撮影機材

- カメラ

INSTA360 X4　INSTA360 X5

360度アクションカメラ
INSTA360 X4, INSTA360 X5
スマートフォンから遠隔操作で録画を行う

- マイク

Zoom H3-VR

アンビソニックス方式VRマイク Zoom H3-VR
360度全方位のオーディオ録音が可能

生成AI技術を使った画像/動画作成

- 中津東高校付近は黒田官兵衛が挙兵した場所だという説がある
→生成AIを使って黒田官兵衛の歴史をPRする動画を作成したい！

- 2025/07/26及び09/27に山口大学の大島先生に
生成AIを用いた画像・動画の作成方法を教えていただいた

- 黒田官兵衛の人生を題材にした動画が完成（動画はQRから）

中津東高校の「からエネプロジェクト」

- 中津市はからあげが有名
→ からあげの廃油をエネルギーにできないだろうか？

- からあげ廃油を回収

- 廃油を燃料として活用

からエネのメリット

・地域資源の活用
→ SDGへの貢献
・防災対策
→非常用電源に活用

- **商標「からエネ」を出願済み**

YouTube & Instagram & ホームページ

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

多世代交流による高齢者の社会参加促進を目指した地域活性化事業

実施主体：日本文理大学 経営経済学部・保健医療学部・工学部建築学科
（実施責任者：副学長 吉村充功）
連携団体：一般社団法人大分県eスポーツ連合、大分県福祉保健部高齢者福祉課、
国東市・旭日ネットワーク協会、豊後大野市・清川町支え合いの
まちづくり仕掛人会、中津市・まほう堂 ほか

1．背景と課題

高齢者が住み慣れた地域で健やかに安心して暮らせる社会、また多様な地域住民が参加する多世代交流活動の促進等による地域共生社会を目指す中、通いの場や高齢者から「地域や子どもたちとの交流が希薄化している」「活動がマンネリ化している」「参加者の高齢化が進み継続が困難」などの課題が挙げられ、地域のつながりの強化に向けた魅力向上を図ることが求められている。

2．事業概要・目的

高齢者の「通いの場」の魅力向上に向け、県内３箇所（国東市国東町、豊後大野市清川町、中津市）に新たな活動としてｅスポーツ等を取り入れ、日本文理大学、大分県ｅスポーツ連合、地域が協力して、高齢者を中心に多世代の交流促進の場を創出する実施検証を行った。

3．実施項目

（１）多世代交流を生かした通いの場の活動メニューの多様化

県内３箇所の「通いの場」に学生が複数回出向き、高齢者がeスポーツを定期的に楽しめ、参加を促進する体制づくりを行った。

（２）多世代交流イベントの開催

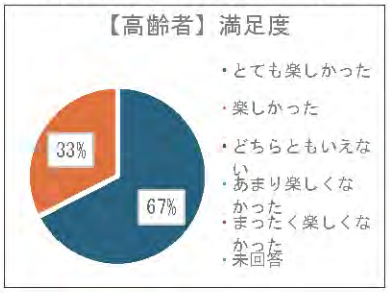
通いの場へ介入（10月から各地区月1回、計2回程度）した後、eスポーツを主とした多世代交流イベントを開催した。eスポーツの他、学生が立案した新たな活動メニューを取り入れ、多世代交流と高齢者の社会参加の促進を図った。

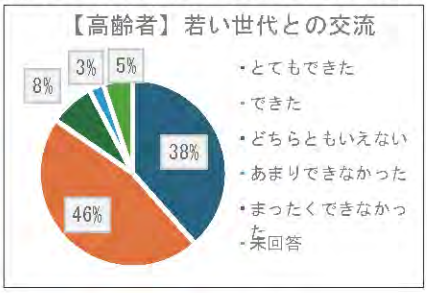
イベントには地域の子ども等も招き、より幅広い多世代交流を図るとともに、今後も地域の子どもたちが通いの場の活動に入り、あらゆる世代が楽しんで交流できる体制強化を図った。

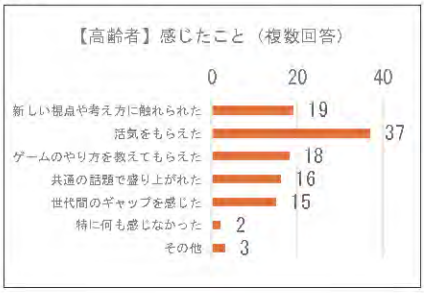
4．効果検証

参加した高齢者及び運営に関わった大学生の双方にアンケートを行った。回答者のうち、全員が参加したことに満足と回答し、高齢者の70%、大学生の96%が次回以降も参加したいと回答した（高齢者の30%は未回答）。また、感じたこととして、高齢者は「活気をもらえた」「新しい視点や考え方に触れられた」、大学生は「高齢者とのコミュニケーション力が向上した」「企画・運営（準備、段取り、役割分担）の重要性を学んだ」が上位となり、双方に良い効果が認められた。

地元の代表者からは「今回、大学生の若い人達がきてくれて本当にうれしい。みんな楽しみにしている。eスポーツは、今年度で終わってしまうが、できれば、これからも若い大学生と関わる場が欲しい。」との言葉を頂き、継続に向けた繋がりを持つことも出来た。







No.3

「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」の自然・地域資源の持続的な利用による地域振興

立命館アジア太平洋大学／サステイナビリティ観光学部　教授　須藤　智徳

祖母・傾・大崩 ユネスコエコパーク
Sobo, Katamuki and Okue Biosphere Reserve

令和７年度 県と県内大学等との課題解決支援事業

「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」の自然・地域資源の持続的な利用による地域振興

立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部　教授　須藤智徳

0. 背景

「ユネスコエコパーク」(※国内通称。正式には「Biosphere Reserve(生物圏保存地域)」という。）は、生物多様性の保護と人間の社会活動との両立を目的に、ユネスコ人間と生物圏（MAB）計画の一環として1976年に開始された。2024年7月時点で登録総数は136ヵ国759地域に及び、うち国内には10地域が登録されている。大分県と宮崎県にまたがる祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク（以下「祖母BR」という。）は、同地域に生息する固有種の多さや山岳信仰と結びついた自然への畏敬の念、及びそれらを伝承する地域文化が評価され、2017年6月に登録され7年が経過したが、住民及び県民の認知度や関心は必ずしも高いとは言えず、その活動も広がりを欠いている。 一方で、世界的にはネイチャーポジティブ（生物多様性の回復）に向けた30by30目標が昆明・モントリオール生物多様性枠組（※GBF。2022年12月）で採択されるなど、生物多様性の保全・回復と社会経済活動の調和を目指すBRへの期待と果たすべき責任は大きくなっている。

ここで、人文科学・社会科学的にBRが発揮する、又は目指すべき効果を特定し、地域社会経済へ還元する仕組みが必要となっているが、専門性や研究能力の観点から、その構築機能を大学等が担う必要がある。

1．取組内容

本事業では、以下の2つの取組を行なった。

取組内容１	取組内容２
祖母傾大崩ユネスコエコパーク（BR）が有する自然価値の特定と経済社会価値への裨益に関する研究 本取組では、BRが有する自然価値によりどの程度の社会的または経済的価値（観光価値を含む）を生み出しているのか推計し、その価値の地域社会経済への活用方法を検討する。具体的には、BRが有する価値の支払意思額（WTP）を試算するとともに、社会的裨益効果として社会的投資収益率（SROI）を推計し、裨益効果の改善方策を検討する。また、可能及範囲で社会的内部収益率（SIRR）の試算も検討する。 本取組で推計したWTP、SROI、SIRRをベースに、BRに対する社会的価値を広く市民に周知し、市民のシビックプライド醸成を図るとともに、BR保全と持続可能な活用に対する意識向上を図る	**学生によるBR研究プログラムの形成** 大学生等が、SDGsやネイチャーポジティブおよび自然価値の視点から、祖母BRが有する地域社会への裨益効果について研究を行なうプログラムの立案及び実施を以下のように行う。 -ゼミでの研究活動として、祖母BRエリアが地域に裨益している状況について仮説を立て、地域住民等へのインタビュー等の現地調査を通じ、仮説検証を行う。 -仮説検証のプロセスで得られた地域課題の解決に向けた方策の検討を行う。 -祖母BRが有する環境価値の裨益効果とその価値を活用した地域課題方策について、学生による発表会を開催し、地域と学生が協働して地域課題の解決に取り組む枠組みを構築する。

2．取組結果概要

2.1 取組内容１「祖母傾大崩ユネスコエコパーク（BR）が有する自然価値の特定と経済社会価値への裨益に関する研究」

(1) BRが有する価値の支払意思額（WTP）を試算するとともに、社会的裨益効果として社会的投資収益率（SROI）を推計し、裨益効果の改善方策を検討した。

2025年11月24日～25日に豊後大野市において対面にてサーベイを実施。2025年12月1日～12月14日の期間、豊後大野市、竹田市、佐伯市を対象にオンラインにてサーベイを実施

有効回答数：n=210

WTP は Willingness To Pay（支払意思額） の略で、「あるサービスや価値を得るために、人がどれだけお金を払ってもよいと考えるか」を金額として表したもの。

WTPの分布：平均値は6,859円、中央値は2,000円、最頻値は1,000円との結果となった。ただし分布が幅広いため、平均値が最頻値からかけ離れる結果となっている。

可処分額に対するWTPの割合：平均値は22.9%、中央値、最頻値はともに10%となっている。すなわち、所得の中で自由に使える資金のうち、10%程度をエコパークの保全に支払ってもいいと考える回答者が多いということがわかる。

SROI（Social Return on Investment：社会的投資収益率）とは、「その事業が社会に対してどれだけの価値（インパクト）を生み出したか」を、金銭価値で評価し推計する指標。

SROIの試算：この試算では、SROIを次の式から計算する。

***SROI*=(社会的価値（貨幣換算したもの）)/(投入したコスト（投資額）)**

SROI推計結果（恩恵額/負担額）：SROIを「恩恵額/負担額」とした場合、**平均値は53,325%（負担額の533倍の恩恵を受けている）、中央値は916%、最頻値は1,000%**となった。つまり、多くの回答者が負担額の10倍の恩恵を祖母山系から受けていると感じているとの結果となった。

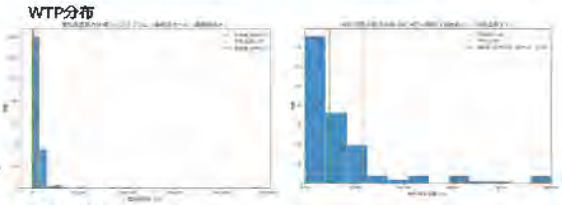
SROI推計結果（恩恵額/WTP）：SROIを「恩恵額/WTP」とした場合、**平均値は2,466,685%（WTPの約250万倍の恩恵を受けている）、中央値、最頻値はともに1,000%**となった。つまり、多くの回答者が支払意思額の10倍の恩恵を祖母山系から受けていると感じているとの結果となった。

(2) BRで活動する団体等へのインタビューを行ない、活動内容やモチベーション等を特定した。併せて、国内の他BR（白山BR等）での取組や社会裨益効果に関するインタビューや情報収集を行い、比較分析を行った。

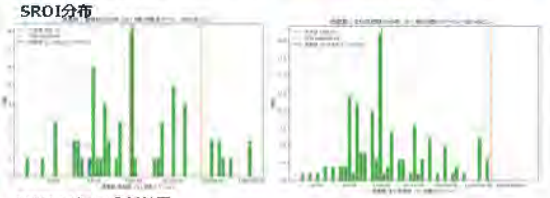
比較分析結果

<共通点>	<相違点>
・市民の活動に対する理解が低い ・活動及び運営のための資金調達、人材確保（高齢化） ・都市部から距離があるため、都市部からの支援者が訪問しにくい、等	・大学の積極的な関与（全国レベルで大学教員や学生が調査研究のために来訪、地域とのネットワークを形成） ・エコパークの地域産業化への活用（農産品や林産品のブランド化と市場開拓）促進

WTP分布



SROI分布



SWOT/クロス分析結果

	<強み>	<弱み>
	・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]	・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]
<機会> ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]	・国際潮流に沿った政策の実施（MAB計画対応に向けた企業等との連携強化） ・域内産品のブランディング強化と海外市場向け販促	・起業連携による資金調達、 ・ブランディング強化による知名度向上
<脅威> ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible] ・[illegible]	・ブランディング強化による知名度向上 ・域外大学を対象とした調査研究活動推進促進 ・他BR（国内・海外）との差別化を強化	・広報戦略の再構築 ・他BR（国内・海外）との連携強化 ・シカの個体管理強化とジビエ産業化（輸出志向）

2.1 取組内容２「学生によるBR研究プログラムの形成」

(1) BRが有する価値の支払意思額（WTP）を試算するとともに、社会的裨益効果として社会的投資収益率（SROI）を推計し、裨益効果の改善方策を検討した。

秋セメスター授業、毎週木曜日6限（18:00～19:40）開講の須藤ゼミの研究テーマとして、本事業を実施。ゼミ３回生を中心にAPU須藤ゼミ生21名が４グループに分かれて調査研究を実施。ゼミでは、エコパークと地域との関係及び地域課題の同定を行ない、リサーチクエスチョンと仮説を設定の上、調査研究を行なった。

ゼミ共通テーマ：祖母・傾・大崩山系ユネスコエコパークエリアの地域社会に与える付加価値とは？

01 毎週のゼミでテーマを掘り下げ
全14回のゼミで、グループごとに研究テーマを設定、リサーチクエスチョンと研究仮説を設定したうえで、テーマを掘り下げて仮説検証を行う。

02 現地調査の実施
２回の現地調査を実施し、現地の方々等へのインタビューやサーベイを通じ情報を収集し、仮説検証のためのエビデンスを収集する。

03 最終結果の報告
本調査で得られた結論を、地域の方々に報告する。

食（原木椎茸）チーム <テーマ>エコパークの自然（クヌギ）と原木シイタケ栽培の関係から、原木シイタケ栽培の付加価値を考える。 <結論>エコパークの自然価値と原木シイタケ栽培は深く結びついている。欧州を中心としてオーガニックやShiitakeへの需要増加に対応した輸出戦略を推進するべき。	**鹿チーム** <テーマ>獣害によるエコパークの生態系破壊や農業への被害を軽減し、付加価値創造のあり方について考える。 <結論>シャープシューティングによる効率的な量を行なうことでシカの頭数管理が可能となるとともに、安定的な捕獲が可能となることからジビエを産業化することが可能となる。
小規模水力チーム <テーマ>井路を活用した小規模水力や地域グリッドから地域活性化を考える <結論>祖母山系を水源とした竹田市及び豊後大野市の井路を活用した小規模水力発電の促進と、発電した電力の地域利用するために地域グリッドを整備し、エネルギーの地産地消を図るべき。	**環境経済価値チーム** <テーマ>豊後大野市におけるエコパークの存在価値を評価し、地域への裨益方策を検討する。 <結論>豊後大野市民の祖母山系に対する支払意思額は約10,000円と試算。これに支払い能力ある人口を掛けると、総額は2.5億円～3.5億円の自然保全金収入が見込めることから、これらを市民が関心を有する水資源保全や景観保全等に活用するとともに、レジャーや伝統文化への投資を行なうことで、支払い意思額の増加を図るべき。

3．まとめ

本事業により、2つの取組を行った。これらの取組は、祖母傾大崩ユネスコエコパークにおける大学による社会科学系調査研究促進に貢献することが期待される。

また、本調査に参加した学生は、地域の方々へのサーベイや対話等を通じ、地域が抱える課題とエコパークの社会的価値を深く理解できた。これにより、今後学生が地域を訪問し、様々な活動に参加する機会となることが期待される。

本事業の実施にあたっては、大分県生活環境部自然環境課様、竹田市、豊後大野市、佐伯市の皆様、及び株式会社地域科学研究所様に多大なご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.5 **青の洞門・本耶馬渓の観光振興**

別府溝部学園短期大学／食物栄養学科　准教授　江島　陽子

本耶馬渓町観光課題への提案とそば粉を使った そばんこスパイスの販売戦略

～令和7年度 2年目の活動～

別府溝部学園短期大学 食物栄養学科1・2年生
コアメンバー：阿部海渚　松田蒼史　山根春奈　徳丸亜美
指導教員：准教授 江島陽子　助手 田端由梨乃

大学連携で期待すること

◆そばを活かした観光振興
◆若い学生の視点から見た本耶馬渓観光の魅力発掘
◆地域住民を巻き込んだ持続的な取組み
◆ＳＮＳを活用した観光ＰＲ
◆本耶馬渓のファンを創出し、関係人口増につながる取組み

経緯／課題／目的／取組内容

◆令和6年度の本耶馬渓町への地域貢献として、本耶馬渓町の魅力発見を目的に「地域の宝探し教室の実施」「そば粉のスパイス考案」を行っており、その活動を引継いだ。
◆本耶馬渓町は観光課題である「観光客の減少」「そば粉の需要不足」を解決するべく、若い世代に「本耶馬渓町」のファンになってもらうために2つの研究に取り組んだ。

【取組み内容】
①本耶馬渓町の魅力を若い世代に知ってもらうための観光方法の提案
②「そばんこスパイス」の商品化と販売戦略

研究実施日程・活動の様子

4月：本耶馬渓支所より地域課題の説明会・顔合わせ
　　本耶馬渓町の現地調査フィールドワーク開始
　　第1回フィールドワーク（R7.4.26）
5月：「そばんこスパイス」試作開始～
6月：第2回フィールドワーク（R7.6.7）
　　第3回フィールドワーク（R7.6.22）
7月：第4回フィールドワーク（R7.7.5）
　　学外研修に向けてビンゴカード・しおりの作成
8月：インスタグラム「出張みそべ」開設・撮影・PR投稿開始～
9月：学外研修（学生モニター）（R7.9.26～27）
10月～12月：「そばんこスパイス」パッケージ決め
　　「そばんこスパイス」最終仕上げ
　　「そばんこスパイス」のポスター作成
　　商品のPR動画撮影（活動の様子を投稿）

【今後の予定】
2月：本耶馬渓町あったかフェス参加（R8.2.15）
　　「そばんこスパイス」試食販売

学外研修の「しおり」作成

「スパイス」試作の様子

打合せの様子

フィールドワーク開始時

【学外研修】産×学×官連携
本耶馬渓町での体験活動の様子

本耶馬渓町の魅力を発信！
若い世代に興味をもってもらうためにInstagramでのPR活動

まとめ

①本耶馬渓町の魅力を若い世代に知ってもらうための観光方法として「ビンゴカードを使用した観光散策」の提案を行った。福澤諭吉先生の歴史を学びながら点在しているお店や観光スポットを、いかに効率よく飽きずに楽しんでもらえるのかを考え、手作りのカードケースに入れたビンゴカードを首からぶら下げて使用してもらった。その結果、モニターとして活動に協力してもらった溝部の学生から、楽しかったとの高評価をいただいためこの提案となった。

②「焙煎そば粉」と「山椒の粉」を組合わせることで、そばの風味がそのまま感じられる『そばんこスパイス』の完成版が出来上がった。また、その販売戦略としてポスターの制作と「インフルエンサーのわたるさん」にご協力いただきInstagramの投稿やラジオの広報活動も行い、新聞に掲載された。

そばんこスパイス

PRポスター

R7年11月24日月曜日
大分合同新聞掲載

成果・感想

①本耶馬渓町の観光方法として散策に使用できる「ビンゴカード」の提案。
②本耶馬渓町の道の駅で販売できる「そばんこスパイス」の商品化。
③「そばんこスパイス」のPRポスターの制作およびPR活動。

上記すべてを本耶馬渓町（道の駅 耶馬トピア）に寄与しました。

私たちは市町村の課題解決を通して「本耶馬渓という町」をとても好きになりました。多くの貴重な体験をさせていただきましたことに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.6 佐伯市の城下町における地域資源の可視化に関するVR表現の可能性と地域連携の実践事業

大分大学／理工学部　教授　古家　賢一

おおいた地域連携プラットフォーム「令和7年度市町村における地域課題の解決に向けた県内大学等との連携」

佐伯市の城下町における地域資源の可視化に関するVR表現の可能性と地域連携の実践事業

佐伯市 Saiki City × 国立大学法人 大分大学

【背景・目的】

佐伯市城下町における地域資源の魅力を、VR技術を活用して可視化・発信することを目的とする。本活動を通じ、地域住民や観光客に新たな視点からの体験機会を提供するとともに、地域資源を活用したまちづくりの可能性を探る。

【事業の活動内容】

城下町のVR映像を3本撮影・編集し、インバウンド誘客の営業資料として活用。

・城下町エリア全般の映像(佐伯城跡も含む)・船頭町エリア全般の映像
・城下町エリアの体験全般をメインとする映像

【撮影風景など】

【VR動画の完成披露会】

令和７年１０月２７日（月）に佐伯市城下町観光交流館にて、メディア３社を集めて完成したVR動画の披露会を実施。
市長やメディアの方々に視聴いただいた。

【VR動画の活用】

完成したVR動画を台湾で行われた旅行博覧会で来訪者に視聴いただき、佐伯市の魅力を発信し観光意欲向上を促進した。

【成果】

VR動画を３本製作した。
完成した映像はYouTubeにて公開するとともに、各種メディアや佐伯市・大分大学の両HPにも掲載され、多くの方に佐伯市の魅力を届け、認知度向上につながった。

動画の二次元コード

【事業関係者】

・佐伯市　　・一般財団法人観光まちづくり佐伯
・国立大学法人大分大学（理工学部 音メディア処理研究室）

令和７年度移住定住動画作成プログラム事業 in 竹田市

担当：おおいた地域連携プラットフォーム　協働事務局　コーディネーター　和田智雄

【事業概要・目的】
都市圏の移住・定住希望者へ向けて、地域の魅力をＹｏｕＴｕｂｅで紹介する動画を学生視点で作る
→地域の生活資源の魅力を掘り起こす。　→暮らす、働く、遊ぶ、学ぶ、触れ合う
→市役所・役場が実施する
きっかけは、自治体が実施する公務員のキャリア形成プログラムではあるが、これを通じて、地元出身（+α）の学生に地域の魅力を再発見してもらうことである。取材をしていく中でその地域と学生の接点を作る。自分が生活できるイメージを養うことを目的とする。
一方、都市圏からの移住定住者の獲得ツールとして活用できるレベルのものを成果として提供する。

【参加学生】
大分大学　経済学部　３年生１人　福祉健康科学部　３年生１人
理工学部　１年生１人
日本文理大学　工学部　３年生１名　２年生１名
【指導教職員】
日本文理大学　工学部　教授　小島　康史
工学部　教授　中西　章敦
工学部　４年生１名　３年生１名（授業実施支援学生）
大分大学　地域連携プラットフォーム推進機構　和田　智雄

【竹田市職員】
竹田市役所　総合政策課　課長　本田　広行
総合政策課　課長補佐　荒井　孝廣
総合政策課　副主幹　重石　和紀
総合政策課　主査　工藤　慧
一般社団法人移住定住支援センター　平　都紀

【事業プロセス】

■教員によるアイスブレイク・チームビルディング、質問力向上研修

■竹田市職員による、移住定住支援施策の紹介等、オリエンテーション

■教員によるシナリオ構成・撮影・編集等、映像作成のための基礎研修

■移住定住者へのインタビュー、撮影

令和7年度　移住定住動画作成プログラムin竹田市　プログラム日程

■移住定住者へのインタビュー、撮影

■中間発表で映像の制作方針を竹田市職員の皆様へ発表、要望・アドバイスをいただく

■撮影素材から映像の構成、テロップ作成、音入れ等の編集作業を実施

■竹田市長へ最終成果の報告　ＴＶ取材あり

＜令和７年度成果＞
竹田市　就農支援_ファーマーズスクール編
https://youtu.be/hh2tf5n_y_s
竹田市　社会人インターンシップ編
https://youtu.be/gbLcRamFif0
竹田市　起業支援編
https://youtu.be/7wA4iKARyYw
※令和６年度：宇佐市役所
令和５年度：中津市本耶馬渓支所
令和４年度：臼杵市役所でも同様の実績あり

担当職員からのコメント

今回の事業は、当市が推奨する移住施策のPRを目的としておりました。こちらの提案に対して学生たちが真剣に意見を交わし、最後まで妥協せず編集に取り組む姿が印象的でした。学生たちの柔軟な感性により、取材者のいきいきとした表情を捉え、非常に完成度の高い動画に仕上がりました。学生たちと共に制作に取り組んだ時間はかけがえなく、参加いただいた学生たちに厚く感謝いたします。動画は市の公式YouTubeや移住相談会で活用していきます。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.10 「アントレプレナーシップ教育」導入

大分大学／経済学部　准教授　松谷　葉子　地域連携プラットフォーム推進機構 コーディネーター　和田　智雄

令和７年度利益共有型インターンシップ(地域) in 由布市

担当：大分大学　経済学部　准教授　松谷葉子、地域連携プラットフォーム推進機構　鍬田建二　和田智雄

＜事業概要・目的＞由布市総合政策課からの課題提供

■地域課題　：移住定住の課題の１つに「仕事がない」という声が上がる。そのため若者の地元離れを食い止める、もしくは、Uターンを選択するために、関係人口として関わり続けてもらい、若手の地元で活躍するプレイヤーを育てたい。

■解決の方向性：地元の由布高校の生徒に対して「アントレプレナーシップ教育」を導入する試みとして、高校生にとって、直近の未来である大学生とともに、アントレプレナーシップ教育をともに受講、体験することで、未来の選択の幅を広げ、自分の可能性をしっかりと体感してもらう。

■実施内容　：大分大学経済学部　松谷准教授、地域連携プラットフォーム推進機構と由布市総合政策課の連携により、大分大学の教養科目「高度化②利益共有型インターンシップ（地域）」の授業内において、受講学生に、高校生向けのアントレプレナーシップ教育について２日間のカリキュラムを考えてもらい、実際に由布市および大分市内の高校生に対して、由布院地域でワークショップを行った。その後、大学に戻って振り返りを行い、講義マニュアルの精度を高め、由布市職員に対して最終成果報告会を行った。

【受講学生】
経済学部　４年生１名　３年生１名、２年生４名
理工学部　３年生３人
【参加高校生】
由布高校　２年生１名　１年生３名
大分鶴崎高校　１年生８人
大分高校　１年生１名
東明高校　１年生１名

【由布市職員】
由布市役所　総合政策課　課長補佐　在津　典良
総合政策課　地域おこし協力隊　大西　あすか

【実施協力団体】
未来応援コミュニティ　b-room　ぷるーむ　代表　佐藤　淳子
（※大分市内の高校生参加へのお声がけに多大なるご協力をいただきました。）

＜授業の様子＞

●１日目（12/20土：大分大学経済学部教室）

■松谷准教授からガイダンスを実施。アントレプレナーシップとは、授業の流れ、ゴールについて説明

■由布市の大西様から、今回の授業実施の背景について説明

■アントレプレナーシップ教育を、自ら受けて体感。この感覚を持って教える立場で授業設計

令和7年度後期　利益共有型インターンシップ（地域）授業スケジュール

日程		場所	午前（10:30～12:00）	昼休み	午後（13:00～18:00）
2025年12月20日	土	大分大学経済学部	【授業ガイダンス】 講義概要（松谷准教授） 授業実施の背景について （由布市　大西様） 自己紹介	昼食	【アントレプレナー教育を体感する】 ・アントレコンプについて知る ・地域特性を考える ・自分の棚卸をする ・地域資源と個人の資源を掛み合わせてみる 全体資源マップの作成 ・発表、全体共有
2026年1月10日	土	大分大学経済学部	【高校生向けワークショップの検討①】 ・全体でプログラム構想について意見共有	昼食	【高校生向けワークショップの検討②】 ・パートごとに役割分担 ・内容、ツールの検討 ・推しポイントの検討 ・全体共有 ・実施当日の準備の分担
2026年1月24日	土	由布市ゆふいんラックホール	【高校生向けワークショップの実施①】 ・アントレコンプの紹介 ・由布市の地域課題の共有 （由布市　大西様） ・自己紹介、アイスブレイク	昼食	【高校生向けワークショップの実施②】 ・マインドマップの作成 ・グループでの資源の共有 ・地域資源マップの作成→宿題
2026年1月31日	土	由布市湯布院福祉センター	【高校生向けワークショップの実施③】 ・自己紹介、アイスブレイク ・宿題→地域資源マップの作成	昼食　兼フィールドワーク（2時間）	【高校生向けワークショップの実施④】 ・地域資源とグループ資源の掛け合わせ →アイデアの創出 ・プレゼン方法についてレクチャー ・発表、全体共有 ・高校生振り返り ・修了証書授与
2026年2月9日	月	大分大学経済学部	【講義マニュアル・報告書作成①】 ・大学生振り返り ・ワークショッププログラムの改善策検討	昼食	【講義マニュアル・報告書作成②】 ・グループ間共有 ・推しポイントの再検討 ・講義マニュアルを各自作成 ・報告書の各自作成 ・由布市へ成果報告

■学生が作成した講義設計マニュアル

■由布市高校生向けワークショップ参加者

●２日目（1/10土：大分大学経済学部教室）

■1日目の内容を受けて高校生対象にプログラムの修正を議論。資源の活用が

■プログラムを役割分担して内容の作りこみ。その後、擦り合わせを実施

■当日、実施するアイスブレイクの選定、ツールの作成

●３日目（1/24土：ゆふいんラックホール）

■由布市大西様から高校生に対して由布市が抱える地域課題について説明

■各パートごとに、学生が講師役になって高校生に対してレクチャーを実施

■講師以外の学生は、高校生と一緒になって、ワークを支援

●４日目（1/31土：湯布院福祉センター）

■ワークショップ２日目も学生が講師として活躍。１日目の状況を踏まえて内容修正を実施

■プレゼンのノウハウもわかりやすく噛み砕いて説明

■高校生の視点で由布市でやりたいことを３つのグループから発表。

●５日目（2/9月：大分大学経済学部教室）

■各自で見つけたプログラムの修正点を反映した講義マニュアルを作成。その後全体で共有。

■２日間の実践を通じて、自分が特に注力したい「推しポイント」を各自、再検討。

■由布市のご担当者および教職員に向けて、各自プレゼンと質疑応答を実施

由布市担当職員からのコメント

このたびの「由布市の未来を考える講座」は、高校生と大学生が共に学び合う貴重な機会となり、地域で挑戦する選択肢を具体的に描く第一歩になったと感じています。若者が関係人口として由布市とつながり続ける仕組みづくりとしても大変意義ある取組であると感じております。今後は本事業で生まれたアイデアを発展させ、由布市として、2026年の「高校生フェス」開催を目指したいと考えております。ぜひ引き続きご協力をお願いいたします。

No.11 南端地区ふるさと祭り支援

立命館アジア太平洋大学／学生団体 「P&F NANTAN」

南端地区ふるさと祭りリバイバル開催事業　南端みんなの祭り

立命館アジア太平洋大学　ボランティアサークル　P&F NANTAN

学生：山村幸歩,石山未来梨,忠良結花,要花音,笠井晴日,川口晃生,神戸亨太郎,濱口果那恵,中木乃愛,竹木杏,Tse Cheuk Shing,Huiko Alexa Helena,Alifiana Khansa,木村花,桐岡樹弓,田口智弓,野中佑哉,南野利鳴花,石原多氣,曽田浄英,Laurence Evan Siswanto,小泉勇翔,秦彩理,寺木愛理,鄭谷碧紘,澤木二葉,鶴丸あや,廣田萌美,山本亮太,林田侑士,中島拓泰,田脇陸人,東明熊輝,金城千奏,鄭為酒

1.活動背景

P&F NANTANは立命館アジア太平洋大学の公式ボランティアサークルである。少子高齢・人口減少が進む日山町の南端地区において、現在は閉校となった「南端小・中学校」を拠点とし、町内の小学生を対象にAPU国内学生と国際学生が遊びや学びを通した異文化交流事業「南端であそぼ！」を令和5年より月に1回程度定期開催している。流しそうめんや芋ほりをはじめ多種多様な内容にて企画・運営し、コロナ禍以降困難であった安心して触れ合う活動体験のできる居場所となっており、関係者それぞれがこのサードプレイスにおける経験を通し地域愛着と協力意向の形成に至っている。また回を重ねるごとに創意工夫し異学年交流事業を丁寧に進め、ダイバーシティ・インクルージョンな活動となっている。この活動の中で10年前まで南端小・中学校で開催されていた「ふるさと祭り」のチラシを校舎で見つけ、その文化を再び地域に根付かせたいという思いに至った。地域住民とのつながりを深め、南端地区の活性化や新しい魅力の創出を目的に、新たに「南端みんなの祭り」として復活開催する運びとなった。

2.実施目的

旧南端小・中学校生徒と地域の方々の交流事業であった「南端ふるさと祭り」が学校の閉校と共に休止となったが、近隣大学生たちの若い力を生かしてお祭りを復活開催し、年齢や立場を問わず「なつかしさ」や、「一体感」を感じられる交流の場を創出することで、地域活性化に繋げることを目的とする。

3.実施までのスケジュール

4月
かつての「南端地区ふるさと祭り」の開催内容について、日出町役場社会教育課の元担当者の方をはじめ日出町教育長や南端地区長への聞き取り調査・協議開始

5月
「南端みんなの祭り」の企画書の作成
日出町役場関係者との協議

6月
南端地区区長さんたちへ祭り内容の説明や開催日の相談

7月・8月
よさこい節りや三味線・沖縄民謡などを行うAPUサークルや、南端地区で受け継がれていた地元盆踊りなど演目や物販等で祭りに協力していただきたい各団体への依頼と調整

9月
南端地区民の方への農村物や加工品の販売依頼

10月
南端地区区長さんたちへ
南端地区民への祭りチラシ配布のお願い
日出町教育長へ各小学校へのまつりチラシ配布のお願い
その他広報活動

11月
南端地区盆踊り事前練習・会場準備
「南端みんなの祭り」開催

実際に小学校に配布したチラシ

4.実施体制

日出町役場
・まちづくり推進課
・日山町教育長
・社会教育課

連携

APU公式サークル
P&F NANTAN
南端小・中学校でのボランティア活動を目的に作られた立命館アジア太平洋大学公式サークル
現在34名所属

「南端みんなの祭り」実施場所
旧南端小・中学校
H29より休校に伴い「南端ふるさと祭り」も中止
現在はAPU生が町内各小学生を対象に月1回程度国際交流をはじめとする青少年健全育成事業を開催中

NPO法人 愛の会
県内児童養護施設を対象にイベントを定期開催中
相互協力体制を推進中

連携

連携

南端地区民
区長さん、公民館長さん
盆踊り指導者
高平おばちゃんズ

参加

参加

参加

APUサークル
・よっしゃ虎城
・珈琲研究会

町内事業者
・KOKOMO

町内各小学生
・日山小学校
・豊岡小学校
・川崎小学校
・藤原小学校
・大神小学校

5.実施内容

開催日の午前中は、南端地区の軽スポーツ大会が行われおり、終了後に「南端みんなの祭り」をスタートした。

・南端高平地区伝統の盆踊り
初盆の家を一軒ずつ回り、夜を徹して踊り続けることのあった供養盆踊りが高齢化に伴い10年以上途絶えていたが、南端地区民にヒアリングをしていく中で、お祭りの復活開催と共にこの盆踊りをみんなで踊る運びとなった。盆踊り自体踊ったことのない学生が多かったことから、前週には予行練習も行った。祭り当日には、口説き・太鼓・踊りには地域の方にも多く参加いただき、国際学生を含め様々な出身地の人々が一堂に会し、南端地区の伝統に触れる機会となった。

・APUよっしゃ虎城
高知県のよさこい節を現代風にアレンジしたAPU大学生の演舞サークル、設立20周年を迎え九州各地で演舞を行う。

・APU珈琲研究会
ハンドドリップやアレンジを学び、カフェ巡りや山店を通して九州の珈琲文化を盛り上げることを目指しているAPUのサークル。厳選したオリジナルブレンドの珈琲豆を使用しハンドドリップにて提供。

・高平おばちゃんズ
今年度九州・沖縄、地域共生社会推進室団体部門の大賞を受賞、地元でお弁当をつくり、見守り配食なども行っている。「第1回南端であそぼ！」開催時から、イベント時のお昼ご飯をおばちゃんズに依頼。

・KOKOMOのお菓子
日山町のカフェ、素材にこだわったスイーツを販売
・南端地区のお米、野菜、よもぎ餅の販売
・ガラポン抽選会
・昔遊び体験コーナー

6.まとめと今後の課題

「南端みんなの祭り」の準備・開催を通して、区長さん方はじめ様々な地域の方々と関係を深めることができた。当日は50名を超える参加者があり、年齢や立場を超えた交流の場を創出することができた。10年間途絶えていたお祭りを復活させたことは、団体として大きな成果であった。一方で、準備開始時期が遅く、地域の方やメンバー間での連絡共有に時間がかかった。多くの関係者を巻き込む企画の実施には、早期に準備を行い、メンバー間で共通認識を持ち、速やかな情報・相互理解を徹底することの重要性を再認識した。今後のイベントも地元の方の力を借りながら、継続的な関係構築と地域の活性化に貢献していきたい。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.13

子育て中の親の孤立予防に向けた相談・連携・参加体制の整備事業

大分大学／福祉健康科学部　講師　齋藤　建児

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.14

地域癌患者が自宅でできるElectric fieldを用いた癌治療機器開発

大分大学／医学部　准教授　平塚　孝宏

「地域における癌患者が自宅でできる電場を用いたがん治療機器開発」

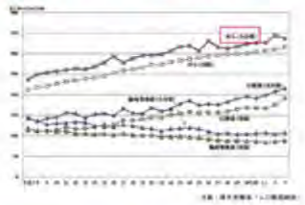
DENKEN

1. 大分大学医学部　総合外科・地域連携学講座
2. 同　消化器・小児外科学講座
3. 株式会社デンケン　イノベーションセンター

平塚孝宏[1,3]、仲野克利[2]、猪股雅史[2]、曽根崎宏昌[3]、首藤孝司[3]、仲 哲生[3]

1. 背景

1-1. 大分県の死亡率の推移



1-2. 大分県の医師偏在

- 大分県内の全医師数のうち、2つの医療圏に県全体約75%が集中
- 残り4つの医療圏は全国平均以下

- 通院困難や医療機関との接点減少
- 治療の継続性（コンプライアンス）低下

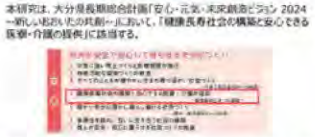
地域におけるがん治療体制の強化が必要

1-3. 新しいがん治療法「腫瘍電場治療（Tumor Treating Fields）」

➡しかし家庭用電位治療器に用いられる低周波の癌細胞への影響は不明

背景（つづき）

1-4.大分県長期総合計画における本研究の位置付け

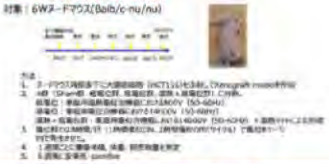


「電場をもちいた健康科学」で「がんの在宅医療の新しいあり方」を創造したい

3. 目的および対象と方法

3-1. 目的

3-2. 対象と方法

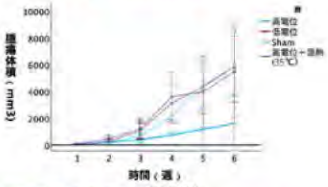


3-3. 実験装置

4. 結果

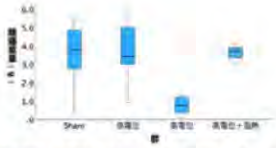
4-1. 皮下腫瘍の肉眼的所見

4-2. 腫瘍体積



- 4群間に有意差あり（P=0.031）
- 多変量比較のPost hoc test(Bonferroni)ではSham高電位群間に有意差なし(P=0.112)
- 6W時点の腫瘍体積比較ではShamより高電位が有意に小さい（p=0.043）
- 6W時点の腫瘍体積比較では高電位が低電位より小さい傾向（p=0.092）

4-3. 摘出後の腫瘍重量



摘出後の腫瘍重量は高電位群がSham群、低電位群に比較して有意に小さかった

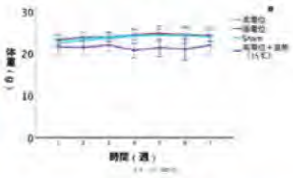
4-4. 腫瘍壊死を伴う割合（腫瘍重量1.1g未満のものにおいて）

群	腫瘍壊死個体数（%）
Sham	0 (0%)
低電位	1 (20%)
高電位	3 (37.5%)
高電位＋温熱	0 (0%)

肉眼的所見

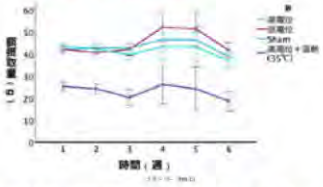
高電位群では37.5%に（1.1g以下の腫瘍において）肉眼的壊死所見を認めた

4-5. マウス体重



4群間に有意差なし

4-6. 餌摂取量



餌摂取量は高電位＋温熱群において有意に低値であった（P=0.001）

5. 結果のまとめ

- 腫瘍体積は4群間に有意差（P=0.031）を認めたがPost hoc test(Bonferroni)(P=0.112)では有意差を認めなかった。
- 高電位の6週目腫瘍体積はSham群より有意に小さかった（p=0.043）
- 摘出した腫瘍の重量は高電位群がSham群及び低電位群より有意に小さかった（p=0.041）
- 高電位群の摘出腫瘍（1.1g以下）の37．5%に壊死を認めた
- 体重に群間の有意差はなかった。
- 餌摂取量は高電位＋温熱群で有意に低下した。

6. 考察

1. 治療効果
- 高電位群では6週目にはSham群より腫瘍体積が有意に小さく、腫瘍重量も小さかった。Post hocにて有意差は認めなかったがサンプル数の増加により、統計的有意差がさらに明確になる可能性がある。
- Sham群と比較し、腫瘍表面に壊死が認められる個体があり、アポトーシスやネクロ－シスなどの腫瘍細胞死が誘導されて可能性がある。

2. 温熱の効果
- 温熱＋高電位群では感染が有意に低下したが、体重には有意差がなく、安全性に大きな問題はないと考えられた。
- マウスにおける32度の温熱刺激は食欲中枢を抑制しうる可能性がある。
- また温熱＋高電位群ではSham群より腫瘍体積・重量が低下しなかった。

7. 今後の予定と将来の可能性

今後の研究計画

1. がん細胞増殖
- 皮下腫瘍作成後に電場照射を行い、縮小効果の有無を検討する。

2. がん増殖抑制効果の機序
- アポトーシス、細胞周期停止マーカーを用いたがん増殖抑制効果の機序について検討する。

3. 膵臓のCell Lineにおけるがん増殖抑制効果の検討
- HCT116以外の大腸がん細胞を用いてがん増殖抑制効果の有無を検討する。

8. 結語

- 低周波の高電位電場は、マウス皮下腫瘍モデルにおけるがん増殖を抑制する可能性が示された。
- 機序と再現性、臨床への外挿は今後さらなる検証が必要である。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

電力の地産地消　ゆのひら産の電気でEV車を走らせて交通課題解決へ！

日本文理大学／工学部　准教授　原田　淳史

令和7年度企業等と県内大学との連携創出事業

『電力の地産池消ゆのひら産の電気でEV車を走らせて交通課題解決へ！』

日本文理大学　工学部　機械電気工学科　原田敦史
ゆのひらんプロジェクト，いくつものかたち株式会社

01　電気自動車による送迎プロジェクト

湯平駅から湯平温泉のアクセス方法

タクシー：台数が少ない

徒歩　　：1時間程度かかる（荷物を持ちながらは困難）

→　多くの宿が直接，送迎している

本事業による新しい移動手段の提案

ゆのひらんプロジェクトによる電気自動車による送迎

- 3人乗り（運転手含む）オープンカー形式の電気自動車
- 旅館と駅の送迎用に利用する
- 電気自動車は「いくつものかたち株式会社」より貸与

日本文理大学の学生が電気自動車に乗りながら動画を撮影したデータから，1分半の紹介動画を作成し，SNSで発信する．

風を感じながら，4kmの道のりをドライブできる感覚を楽しむことができる

- 湯平温泉の美しい街並み
- 復興が行われている現場

02　地域の行事に参加＆SNSによる魅力発信

石畳清掃に参加し，地域の方々と交流を行う

学生による湯平温泉のSNS発信

- 参加した学生に湯平温泉の魅力あふれ，美しい形式をスマートフォンで撮影する
- 撮影した写真はSNSで発信し，多くのみなさんに湯平温泉の魅力を伝えることができた．

まとめ

大学，ゆのひらんプロジェクト，いくつものかたち㈱のそれぞれの強みをいかしながら新しいプロジェクトをスタートさせることができた．
今後も，継続的に実施し，完成度をあげていきます．

03　水力発電設置プロジェクト

豪雨水害で使用できなくなった温泉配管を活用する

使用していない温泉配管を外している作業

街なかに配置し，発電も行いながら観光名所のひとつに！

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.16

AIアバター×観光地域×大学生による デジタル地域創生プロジェクト in 道の駅ゆふいん

別府大学／国際経営学部　講師　小野　貴史

AIアバター×観光地域×大学生によるデジタル地域創生プロジェクト in道の駅ゆふいん

別府大学 国際経営学部国際経営学科　講師：小野貴史
学生：平林那菜　小森優那　渡邉結愛　池田博貴　谷山須奈央　寺本弥真斗　豊田格己
羽田野秀剛　松田玲也　中山修也　パモド・マドゥランガ　姜　大豪

プロジェクトの目的と連携体制

目的

・地元産品のストーリー性を活かした販路拡大
・デジタル技術(AIアバター・SNS)と学生の視点による地域ブランディング

連携体制

有限会社道の駅ゆふいん	別府大学	大分バス株式会社
●地域の魅力や交通などの情報発信 ●物産館、飲食施設 ※（リニューアル工事中）	●学生・若者・留学生目線や発想力 ●観光・地域経営コース	●地域密着型の公共交通サービス ●AIアバターガイド「ガイドロイド」

ゴール

・将来的なライブコマース基盤の構築、大分県内各地への展開、モデルの確立

「道の駅ゆふいん」の地域課題

・高速道路のICからは近いが、多くの観光客が訪問する中心街から離れている
・観光動線から外れた立地のため、十分な集客が得られていない
・SNS等のデジタルメディアの活用が弱い
・商品生産者の高齢化や減少により、担い手不足⇒地域産業の活性化

活動報告①：地元産品プロモーション（生産者インタビュー）

取材日：令和7年10月30日

実施目的

・商品の背景にある「ストーリー」を映像化し、消費者に届ける

取材対象

・阿南農園（由布市挾間町）　利光ひとみ 氏　玉置清子 氏

取材のポイント

①貴重な「少種（種が少ない）かぼす」の生産
②商標登録などのこだわりをピックアップ　「みょうおん」
③収穫の現場と生産者の想いを映像・写真で収録

阿南農園のストーリー

・由布市挾間町で両親のかぼす農園を、農業経験のない姉妹二人で継承

※出典：阿南農園HP

・大分県ではすでにかぼすが有名であり、違うことをしないと売れないため、希少価値のある少種かぼすの栽培を始めた（43本のかぼすの木からなる小規模農園）

・かぼすをドーナツ状に植えることで、風通しを良くし害虫を抑える

完全無農薬栽培に成功

・「みょうおん」の商標登録 ➡ 小学校の校歌などで歌われ、昔から馴染みのある妙音山が由来

「みょうおん」の特徴
①完全無農薬栽培
②ミネラル由来の塩味、甘味が相対的に高く、独特の風味がある
③果皮が薄く種が少ないため、果汁が多い

※画像撮影：小野ゼミ

アウトプット：阿南農園のインタビュー動画およびSNSコンテンツ

・インタビュー動画（公開中）およびSNSコンテンツ（近日アップ予定）

阿南農園プロジェクト①
https://youtu.be/4wnaOLFwuGM?si=4BQI8r96ht5SK893

阿南農園プロジェクト②
https://youtu.be/9-aiK5FJMbk?si=D7sFVEENLvXjm-jT

阿南農園プロジェクト③
https://youtu.be/E0FKR5dzy81?si=hurG8Af3D7YiQG-Z

※出典：小野ゼミチャンネル（YouTube）

活動報告②：県内「道の駅」魅力発信調査と分析

調査概要

・大分県内全道の駅を対象とした現地調査

調査の視点

・「道の駅ゆふいん」の魅力を再発見し、差別化するための分析

主な分析項目

・各駅の「独自性」と「強み」
・地元特産品のPR手法・販売状況
・ソフトクリーム等の「ワンハンドグルメ」展開状況

※画像撮影：小野ゼミ

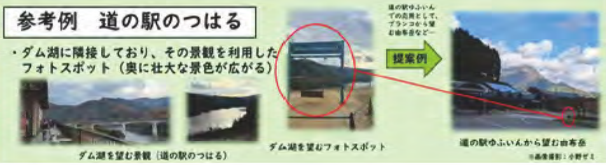
各駅の「独自性」と「強み」

代表例　道の駅きよかわ

・清川の特産品である桃をアピール
・道の駅の景観の統一（ピンク色が目立つ）
・桃ソフトや桃のコンポートゼリーなど桃に関連した商品の販売
・桃神社というフォトスポットもあり、若者や家族層からの興味をひきやすい

参考例　道の駅のつはる

・ダム湖に隣接しており、その景観を利用したフォトスポット（奥に壮大な景色が広がる）



ダム湖を望む景観（道の駅のつはる）　ダム湖を望むフォトスポット　道の駅ゆふいんから望む由布岳

※画像撮影：小野ゼミ

提案　オリジナルソフトクリーム

○「生搾りかぼすソフト」
・ミルクソフトにかぼすの実をセットで販売
・購入者自身がミルクソフトにかぼすを搾る

○特徴
・体験価値：食べる前にひと手間かける（記憶に残りやすい）
・味の変化を楽しめる：
最初はミルク、途中から爽やかなかぼす
自分好みに味の調節が出来る

○期間限定商品の開発（黄金かぼすソフト）
・あまり知られていない、甘味や旨味が強い黄かぼすを使う
・期間を限定することで印象に残りやすくなる
・値段は高くなるが、ワッフルコーンや金箔をまぶすなど
プレミア版商品を出すことでインバウンド観光客も注目

提案：道の駅ゆふいんオリジナル商品の開発

①かぼすチキンバーガー
・特徴
かぼすをバーガーに添える
柑橘の爽やかな香り
さっぱり×ジューシー（搾る）
・見た目
緑色が多く、爽やかで映える

②おおいた和牛100%バーガー
・特徴
大分県産牛の使用
地元でとれた野菜を使用
ガッツリ系
・見た目
ボリューミーで目を引く

「道の駅ゆふいん限定」
「ここでしか味わえない！」
オリジナル商品の宣伝として、"大分名物"であるということを前面に打ち出す

活動報告③：活動報告会（経緯説明・活動報告・提案）

実施内容
・本会場（司会）
・アバターによる報告説明
・道の駅ゆふいんの現状（中継）
・阿南農園インタビューによるストーリー動画

※画像撮影：小野ゼミ

展望：情報発信フォーマットの標準化と県内展開の可能性

～「道の駅ゆふいん」発のDXモデルを、大分県全域へ～

1. 研究テーマ：汎用性の検証

問い：「道の駅ゆふいん」で構築した手法は、他の道の駅でも通用するか？
目的：数ある他の道の駅に対し、同様のフォーマットで地元の情報を発信できないかを研究・検証
背景：今回実施した「県内道の駅調査」の結果を踏まえ、他駅の課題（情報発信・人手不足等）にフィットする形を探る

2. 提案する「ゆふいんモデル」のパッケージ化

①学生×生産者インタビュー
・地元産品のプロモーションとして、生産者の想いや商品ヒストリーを深掘りする取材・配信手法
・若者の視点で地域のストーリーを発掘し、映像化する
②AIアバター（ガイドロイド）活用
・AIアバターによる多言語観光案内や情報ライブ配信
・将来的なライブコマースや、24時間対応可能なデジタル案内板としての活用

3. 将来展望：県内各地への横展開

・「デジタルを活用した地域との共創モデル」として、将来的に大分県内各地の道の駅や観光拠点への展開を視野に入れる
・若者の発想力と企業の技術（AI）を融合させ、新たな「地方創生のかたち」を提示するビジネスモデルを目指す

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

立命館アジア太平洋大学／戦略企画チーム　社会連携プロデューサー　塩見　剛

グリーンツーリズム魅力発信事業

NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会
立命館アジア太平洋大学

課題

宇佐市安心院町は「農泊発祥の地」として官民協働で農泊を推進し、グリーンツーリズムによる関係人口の増加や観光振興及び農山漁村活性化への取組が評価され、先進的事例として全国的に知られるようになった。
人口減少が進む現代においても年間数千人規模の利用者が安心院町を訪れているものの、高齢化や後継者不足等による受入家庭の減少や、物価高騰による教育旅行等の旅行形態やニーズの変化による農泊利用者数の低迷が続いていることから、**農泊発祥の地「安心院」の魅力発掘及び発信を効果的に行う必要がある。**

概要

令和6年度に地域課題の解決を目的に実践研究する取組の一環として、行政と立命館アジア太平洋大学とが協力し宇佐市安心院町の観光振興を考える共同研究プログラムを始動した。学生が安心院地域の各識見者を訪問し、安心院地域における情報ネットワーク・農泊の現状や課題の洗い出しを行う等、現存する観光資源を活かした持続可能な地域づくりについて現地視察や調査を行った経験を、**宇佐市安心院町の「農泊」が抱える課題のひとつである情報発信不足の再構築**に活かす。

事業内容

現在、宇佐市では約25件(※)の農泊受入家庭が個人利用をはじめ教育旅行やインバウンドの受入れを行い、年間約2,000人の利用者がいるものの、利用者数は年々右肩下がりであることから、**令和６年度に行った共同研究内容で得た知識やアイディアを活かし、農泊における情報発信に焦点を置き、各受入家庭へのヒアリングや撮影を行うとともに、広報手段としてSNSを活用し情報を配信し、これまで教育旅行利用者が主な利用者であったが、個人利用者にもターゲットを広げ農泊利用者及び農泊開業者の増加につなげる。**（※)NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会に加入する受入家庭のうち実働している受入家庭数

▶利用者数の推移

年　度	国内一般	国外（※1）	教育旅行（※2）	延べ人数計
令和２年	150	0	103	253
令和３年	253	0	88	341
令和４年	215	278	4,070	4,563
令和５年	308	829	1,040	2,177
令和６年	272	246	1,566	2,084

▶農泊開業者数の推移

年　度	軒　数
令和２年	19
令和３年	20
令和４年	21
令和５年	22
令和６年	25

＜プロジェクトスケジュール＞

7月30日	受入家庭への事業説明会開催
8月	ヒアリング先決定
9月	動画撮影
10月-11月	ヒアリング実施
12月	Instagram開設 内容編集・投稿

＜活動体制＞

【活動地域】
宇佐市内
【プロジェクトメンバー】
◆NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会　宮田静一　岡部友紀　瀬戸久子　谷川静子
◆立命館アジア太平洋大学（学　生）大谷杏妃　田村望桜　三井涼暖　小溝柊汰　高橋脩　三村香春
（教職員）塩見　剛（アウトリーチ・リサーチオフィス）
吉澤清良（サステイナビリティ観光学部　教授）
◆農泊受入家庭
あいはなはうす　あたしんち　王さまの小屋　GreenFarm　シェア古民家おむすび
自然派カフェレストラン鈴ご　竹ちとせ　高並郷せせらぎの森　竹取物語もっちゃんち
たまちゃんの縁側　天空の庵ふきの屋　農村民泊里山の四季　百年乃家ときえだ　板昔ばなしの家
ホタルの里　ゆずりはの里
※令和７年７月時点で実働受入家庭25件のうち、SNSへの投稿希望家庭16軒

＜活動内容＞

学生の客観的視点による安心院農泊の課題の洗い出しを行う中で、現代の主要な情報収集ツールであるSNSを活用し、**農泊利用手続き及び内容に係る可視化を図ることで農泊をより身近なものとして周知する**必要性が挙げられた。
利用者が求める情報をシートにまとめ、各受入家庭を訪問し、ヒアリング項目について詳しく聴取・撮影を行い、編集作業をする中で、**視覚的に分かりやすい内容にまとめ投稿**するとともに、農泊の内容についての可視化を図るため、受入家庭との**農村・農食体験など一連の流れを３つの動画にまとめリール投稿**により紹介した。

まとめ

『「農泊発祥の地」安心院』の知名度を活かし、滞っていた情報発信部門を現代のニーズに合わせることにより新たな情報ツールを立ち上げることができたほか、各投稿のキャプションに農泊予約先リンクを掲載することによりスムーズな問合せが可能になった。
今後は、農泊をより広く周知できる重要な情報配信ツールとしてＳＮＳを活用し、フォロワー数を増やすための仕掛けを打つとともに、農泊を身近に感じてもらえるよう継続的な運用を行っていく予定である。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.18

多文化共生地域の未来ビジョン創出事業 ～技能実習生×APU×地域協働モデルの構築～

立命館アジア太平洋大学／サステナビリティ観光学部　教授　上原　優子

令和7年度 大分県 企業と県内大学等の連携創出支援事業

「多文化共生地域の未来ビジョン創出事業～技能実習生×APU×地域協働モデルの構築～」

【実施主体】 竹田商工会議所

【連携大学】 立命館アジア太平洋大学（APU）

サステイナビリティ観光学部 上原ゼミ 竹田プロジェクトチーム（APUチーム）

竹田商工会議所 × APU

1.　事業の背景と目的

過疎・高齢化が進む地域において，技能実習生は地域経済を支える重要な存在である。しかし，文化・言語・生活習慣等の違いから生じるトラブルや，実習生を単なる労働力として扱う意識の低さが課題となり，失踪問題も全国で多発している。こうした状況を踏まえ，技能実習生問題を切り口に，多文化共生社会の実現と日本の将来について検討することが不可欠であるという問題意識が本事業の背景にはある。本事業の舞台となる竹田市の監理団体の1つである竹田商工会議所と立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部の上原ゼミに所属する学生を中心とした「APUチーム」は，フィールドワークを通して現場についての理解を深めながら，技能実習生に「竹田に来てよかった」「また戻りたい」と思ってもらえる地域づくりに必要な要素を検討し，竹田市に適した多文化共生社会のビジョンを共に描いていくことを事業の目的として掲げた。

2.　竹田商工会議所と技能実習生

外国人技能実習生の受入れを支援する監理団体は全国に約3,800団体あり，大分県内では37団体が運営されている。一方，全国515ある商工会議所のうち，技能実習生等の受入事業を実施しているのはわずか13会議所に過ぎない。従って同商工会議所の取り組みは公共性が重視された希少なものであり，先進的かつ独自性の高いものとなっている。

3.　取り組み内容とその推移

本事業は，ガイダンス，竹田市内のフィールドワーク，竹田市多文化共生未来ビジョン会議，最終報告書の作成の4つのステップで行われた。

STEP ① 7月11日 ガイダンス @APU

APUチームに本事業の概要および目的への理解を深めてもらうため，竹田商工会議所がAPUを訪問。まず，APUチームによる竹田市に関するリサーチ発表が行われ，その後，竹田商工会議所から技能実習生受入事業の取り組みについての説明に加え，在留資格制度や出入国管理政策に関する解説が行われた。さらに，グループディスカッションを通じて多角的な意見交換がなされた。これにより，APUチームは抽象的な学術テーマにとどまらず，竹田市が直面する現実の社会課題に直接触れる貴重な機会を得た。本ガイダンスを通じて，APUチームは次のステップに向けた事前準備として，現地調査における課題設定や調査項目の具体化・明確化を図った。

STEP ② 8月21日-22日 フィールドワーク @竹田市

竹田商工会議所の協力のもと，APUチームは現状把握および課題の明確化を目的として，竹田市内の技能実習生受入企業および竹田市在住の技能実習生に対するインタビューを中心としたフィールドワークを実施した。その結果，公共交通機関の運行本数の少なさに起因する「移動の不便さ」が，通勤や買い物，医療機関への通院など技能実習生の日常生活全般に影響を及ぼしていることが明らかとなった。文献調査やインターネット上の情報のみでは把握が困難であった生活上の課題や受入企業・地域社会との関わり方などの具体的実情に触れることで，今後の支援策や共生に向けた取組を検討するための重要な示唆を得ることができた。

STEP ③ 9月22日 竹田市多文化共生未来ビジョン会議 @竹田市

地域住民，市および県議会議員，行政（大分県および竹田市），受入企業，出入国在留管理庁，日本語教師等の関係者が課題を共有し，多文化共生のビジョン創出を目的とした会議を開催した。前半では，外国人受入事業の現状と課題について情報が共有され，APUチームからは現地調査の結果が報告された。後半では，ファシリテーターの進行のもとワークショップが行われた。

ワークショップで賛同多数の意見や提案

- 地域住民への多文化共生についての説明会開催
- 近隣に住む外国人への気軽な声かけから始める
- APUの学生たちの意見が素晴らしかった（若い世代の意見を積極的に取り入れることが重要）
- カラオケ・スポーツ大会などを通じた交流会の企画
- 竹田市を多文化共生地域のロールモデルにしたい

主要な課題

- 公共交通機関が少なく技能実習生の行動に制限がある
- 日本語学習の機会をさらに充実させる
- 外国人相談体制の人員増加などの体制強化

STEP ④ 10月-12月 APU チーム最終報告書 & 事業実施報告書作成

STEP3の会議の意見集約・分析，また本事業より明らかになった課題認識や展望等をまとめた調査報告書を作成し，次年度以降の取り組みについて検討。APUチームからは，以下の3つの施策が提案された。

1. 日本語教育の充実による技能実習生支援
日本語教育の効果的な手法や授業運営のノウハウを学び，技能実習生が実務に必要なコミュニケーション能力を身につけるための環境整備をさらに進める。

2. 専門用語単語帳作成による技能実習生の業務理解促進
現場での重大な事故や業務ミスを防止する観点から，業務で使用する頻出用語を予め翻訳し「専門用語単語帳」を作成。事業者の指導負担を大幅に軽減する。

3. 技能実習生の余暇充実と地域参画のためのサッカー大会企画
地域と連携したサッカー大会を企画・実施する。技能実習生が地域社会と交流しながら健康的で充実した生活を送る場を提供（インドネシア出身の技能実習生は多いが，同国でサッカーは国民的スポーツである）

事業実施報告書

4.　総括ー成果と教育効果

本事業は，監理団体である竹田商工会議所とAPUチームの学生が協働し，竹田市における外国人材受入れの現状把握と将来像の検討を行った点に大きな特徴がある。竹田商工会議所が多文化共生を軸に国際化・国際交流の進展を重視しながら，技能実習生に対してきめ細かな支援を行ってきた実践を，学生が調査・分析を通じて可視化した。また，技能実習生が市内の多様な産業分野で重要な役割を担う一方で，地域住民との交流機会が限定的であるという課題を共有できたことは，今後の受入体制の充実に向けた重要な成果である。さらに，9月22日に開催した「竹田市多文化共生未来ビジョン会議」では，地域住民，行政，外国人材受入企業等が一堂に会し，現状や課題，将来展望について意見交換を行い，竹田市の将来を検討する議論の土台を形成した。このことも本事業の大きな成果である。

APUの学生にとって本事業は，技能実習制度や外国人材受入れを，理論を踏まえつつ実践的に学ぶ機会となった。実現可能性を意識した具体的な学生らしい提案を行えたことは，APUが掲げる多文化共生教育を地域社会との協働の中で実践する機会となった。また，市民が多文化共生に高い関心と問題意識を持ち，地域の将来像を真剣に考えている姿に触れたことは，学びが社会と直結していることを実感する経験となった。

今後に向けて，監理団体，教育機関，行政，地域がそれぞれの役割を共有しながら，技能実習生と地域住民との継続的な交流の仕組みづくりを進めていくことが重要である。竹田商工会議所の人的資源は限られるため，学生や地域人材との協働を通じて関わりを広げ，技能実習生が竹田市に根付く環境の整備につなげていく必要がある。今回得られた知見と関係性を基盤として，今後も実践と検討を重ね，竹田市における外国人材受入れの質的向上と多文化共生のさらなる推進を図りたい。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

令和7年度
「県内企業等と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業」

大分市上野・古国府地区における文化遺産を活用した地域活性化・観光まちづくり推進事業

申請者：(株)文化財保存活用研究所　×　大分県立芸術文化短期大学　講師　堤　亮介

対象地域の課題点（上野・古国府地区）

失われた都市祭礼「府内祇園会」復興に向けて、未指定の文化遺産を起点とした動きが生まれていたが、地域内で事業を主導する存在や、調査・復元・活用の進め方、資金調達の方法といった指針が定まっておらず、取組を継続的な事業へと発展させることが課題となっていた。

事業目的

本事業は、企業・大学・地域住民の協働により、地域に残る未指定文化遺産の保存・活用を通じて、地域文化の再発見、観光資源化、地域活性化を図り、地域課題の解決に取り組むものである。また、本事業を契機に文化遺産の価値を高め、文化財指定を視野に各種事業に取り組むものである。

対象地区の位置する上野丘陵地

主な事業内容

1. 未指定文化遺産の保存・修復・公開
2. 文化遺産を活用した観光商品の開発
3. 文化遺産の保存・修復に係る資金調達支援
4. 文化財申請の支援

実施事業・成果・今後の展開

・科学分析の実施と公開（赤外線撮影・蛍光X線調査）	9月～12月
・調査結果を基にした観光商品の開発（学生・地域住民制作）	10月～12月
・本事業の成果を共有する講演会（地域住民招待）	11月16日
・本事業の成果を共有する講演会（地域住民招待）	11月24日
・大絵馬復元手法の視察と復元事業実施（現在実施中）	9月～12月
・地域住民への成果報告と返礼品お披露目	1月15日

事業の効果

調査結果をもとに観光商品が完成し、文化財指定に向けた申請準備と資金調達の基盤が整ったことで、地域主体による継続的な事業展開の基盤が形成された。

今後の課題

大絵馬の復元作業は現在も継続して実施している。文化遺産の調査・復元・活用は短期間で効果が現れるものではないため、今後も継続的に関与し、段階的に成果を積み重ねていくことが課題である。

2025.11.12
読売新聞掲載 →

本事業に関して読売新聞社から取材があり、地域住民・連携企業・学生で対応。事業成果を社会に発信した。

大分 幻の府内祇園祭
復活目指し大絵馬研究

◆大分県立芸術文化短期大学　歴史観光学研究室
TEL：097-545-4564　Email：r-tsutsumi@oita-pjc.ac.jp

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

大分在来トウモロコシ「もちとうきび」コーンスプラウトの高品質・安定生産への挑戦

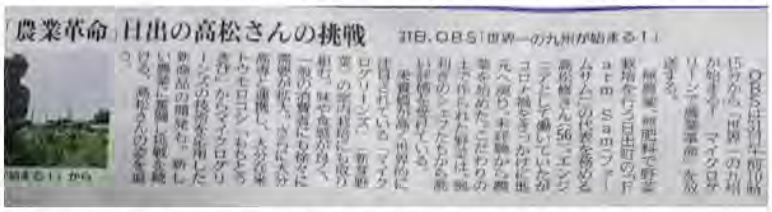
連携機関
大分工業高等専門学校（一般科理系）　合同会社 Farm Sam
准教授　森田 昌孝　　CEO 髙松 修

■ 事業概要
江戸時代に大分へ伝来した在来トウモロコシ「もちとうきび」
本事業では、スプラウト技術と在来作物の農学的知見を融合し、国内初となる「もちとうきびスプラウト」を創出、ブランド化・地域特産化に向けた試験を実施。

■ 研究・開発のポイント
・発芽・栽培技術の確立（栽培方法で特許出願）
・成分分析による付加価値化（グルコース特定、ビタミンC含有確認）
・メディア発信・試験販売による市場性検証

■ 主な成果
【知的財産】
・商標登録「紫ノの芽」（2025年6月12日）
・特願2025-169703 スプラウトの栽培方法（2025年10月7日）

【メディア掲載】
・Yahoo!ニュース／FM大分／大分合同新聞／RKB毎日放送


「農業革命」日出の高松さんの挑戦

もちとうきびのスプラウト
「生きた文化財」守ろう
在来作物研究会が発足
高専准教授と農家が開発
甘くシャキシャキ食感

■ 試験調査先（レストラン等との連携）
・坐来（2025年9月～ メニュー化）
・ブエナスタ（西大分）・ホテル日航大分

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

大分大学／経済学部　准教授　朝美　淑子

セメントで攻めんと！　チル(Chill)な津久見の新たな観光フェーズ

大分大学　経済学部　朝美ゼミ

1. 問題点：

津久見市は、大分県の東海岸に位置する市である。県内では最も人口が少ない市であるが、豊かな海と閑静な島々、そしてセメントなどの産業が盛んである。一村一品商品では、保戸島のマグロ、津あじ・津さば、清見ミカンなどが一般的に知られている。観光資源としては、うみたま体験パークつくみイルカ島、四浦展望台、つくみん公園、花火大会、河津桜などがあり、観光の目玉としてこれらの資源を HP の活用や SNS の展開などを行ってきた。しかし、「大分の観光や遊び」といったものの中で、津久見市はヒットしない場所であることが分かった。そこであらたに津久見市の大きな産業である「セメント」産業に学生が目を向け、新たな情報発信を始めた。

2. 実践したこと

2-1　事前現地調査

実際に津久見市へ出かけ自分たちので津久見市を歩き、観光協会の方から意見を伺ったり、市民と話してみる。

つくみイルカ島にて観光体験やイルカ島での観光客についてお話を伺う

観光資源であるモイカとマグロを自分たちでも食べてみてインスタグラム等でアピールする作戦を立て

2－2　大学での取り組み・外部への情報発信

セメントを知ってもらうために、「セメントくん」を制作。オリジナルつくみん兄妹キャラクター作成

セメントくん

つくみん

初年度は、大分大学の学生に「津久見を知ってもらう」という目標で学園祭を中心に　大分大学朝美ゼミのインスタグラム「tukumirunabi」つくみるナビ～大分×旅×グルメ～を作成、同時に x(旧ツイッター)も発信した。まずはセメントくんからヒントを得て、セメントアイス（黒ゴマ味）を販売した。合わせて津久見市にご協力を頂き、名産のぎょろっけも 200 個完売した。保戸島の地域土産や津久見みかんジュース等を販売する中で、多くの学生に津久見を知ってもらうきっかけとなった。つくみんの着ぐるみも貸していただき、学園祭に訪れた子どもたちにも人気であった。「津久見を知ってもらう」という大きな目標はおおよそ達成できたが、今後どのように市民に、また県外に発信していくかが、今後の課題となった。オリジナル T シャツはつくみんをデザインしたものとイルカをデザインしたものを学生が作成した。また、観光客がわかりやすい、QR コードを利用した津久見オリジナルマップも作成したことは単年度の成果としてはよくできたと思われる。今後も継続して研究したい。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

みんなで作る
避難所での健康維持に関する「かるた」の作成と評価

大分大学 福祉健康科学部 理学療法コース
3年　中安陽紀　氏家響己
指導教員：安藤敬子

●地域の特性
令和2年、中津江村では大雨による土砂災害によって、ライフラインが埋設されている主要な道路が崩れ、高齢者施設や住宅が被害を受けた。被害を受けた中津江村栃野地区の特徴としては、人口減少や少子高齢化が進み、地形的な特徴として、急峻な山地（標高差780m以上）であり、深いV字谷で集落が谷底に集中しており、下筌ダム（蜂の巣湖）による人工的な谷地形の変化があるとされている。そのため、表層崩壊・土石流が発生すやすく、土砂災害の影響を受けやすい。

●地域課題
課題1．地形的に豪雨時に土砂災害による道路寸断が起こり、孤立し医療や生活が不安定になりやすい
課題2．高齢化が進み避難所での避難者の生活において、健康問題が発生したり悪化するリスクが高い
課題3．避難所での生活はイメージしにくく、避難生活についての知識や十分な準備ができていない可能性

大分県日田市中津江村

●事業の目的
①高齢者や子供など、避難所での生活をイメージできない人に対する**避難所での生活や健康を維持するための知識を遊びの中で伝える。**
②災害発生時に災害弱者の健康問題を発生させない。また、安全を守るため、地域の特性や避難所設営の状況等を知った上で、**地域に根差した内容**（過去の災害経験や地域に残る災害に関する言い伝えなども含む）を基に「みんなでつくる避難所でも健康を守る（理学療法士編）！かるた（仮称）」を作成する。
③情報を基に作成したかるたで**子供たち、高齢者**と遊びを通して災害時の避難所での生活を守り、　健康問題を発生させない取り組みについて学ぶ。

高齢者施設や住宅、主要な道路への被害

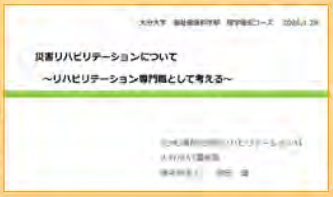
●事業実施経過および実施内容
①現地での活動
・日田市中津江振興局、中津江村づくり役場、福祉関係者会議参加者への聞き取り
・フィールドワーク（第43回中津江村ふるさとまつり）での地域住民への聞き取り

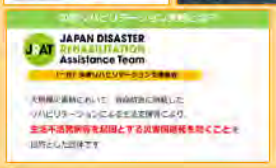
②自己学習と講義とディスカッションでの学習
・鍬田翼氏（JRAT）による講義
・災害に関する文献や教科書による学び

色々な方から聞き取りを行った

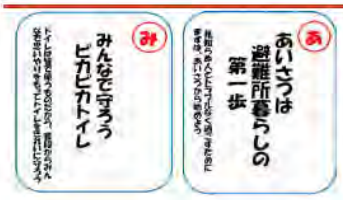
たくさんの方が参加されている村祭りでお話を聞かせていただいた

JRATの活動についての講義と実際の被災地での経験についてお話を聞かせていただいた





【学生の声】
・地域の方と実際に会話して、地域の現状を知ることができた。もっと実地調査をしていく必要があると思っている(3年生)。
・地域ごとに課題は異なるため、その地域の特徴を理解した上で取り組むことが大切であると感じた。中津江村の方に対して成果を還元したいという気持ちになり、一層モチベーションが上がった(3年生)。
・県外出身なので、大分のことはよくわからなかったけど、この事業を通して大分に興味をもった(3年生)。
・講義を聞いて、被災されたことによる日常生活の大変さが伝わったし、少しでも中津江村の方々に役に立ちたいと思った。この事業で得た災害についての知識をもって活動をしていきたいし、地域に貢献していきたいと思っている(3年生)。
・小学校低学年の女の子に避難所に行くなら、何が一番大事？何を持って行きたい？と聞いた時、いつもつかう、お父さんがかってくれた抱き枕を持って行くと言っていた。些細な事だと思わず、その人が大事だと思う気持ちを大事にすることが不安を軽くしたり、生活リズムが良くなることになると感じた(3年生)。
・過去に起きた災害の時の状況、支援の仕方を知る機会になった(1年生)。
・講義を聞いて、避難所のトイレやお風呂の問題、災害関連死の問題、持病を持つ方や高齢者の問題など、実際の状況を知ることができた(1年生)。
・避難所の混乱した状況の中で、支援団体同士での情報共有をしながら進めることの難しさを知った。自分ができることと、できないことをハッキリさせることも大事だと思った(1年生)。
・避難所での危険因子を排除し、災害関連死を増やさないため被災者の不安な状態を助長させないようにするためにも最大限の配慮が必要だと思った(1年生)。
・JRATとしての実際の活動経験のある方からお話を聞き、質問もすることができ、良い学びになった。何度聞いてもまだまだ知らないことが多くあり、継続して学ぶことが必要だと実感した(1年生)。
・理学療法士としての視点だけでなく、聴覚や視覚に障害がある方、要支援者の避難や避難所での対応、生活を支援すること等についても考えていく必要がある。これは、みんなで考えることが大切だと思った(1年生)。



●進捗と発展
中津江村での聞き取り、地域住民の方からのお話、JRATで活躍されている方の経験談、教科書や文献などを通して得た知識や情報を基に、現在、中津江村の住民の方専用の"かるた"を作成中である。完成後、中津江村づくり役場で開催されている「つどいの場」において、住民の皆さんと内容や表現について検討していく予定である。中津江村の豊かな自然についての内容も読み札に入れ、子ども達、高齢者の方、避難所を開設する方、避難所で生活する方のためになるような"かるた"になるように今後も活動していく予定である。そのためにも、今後も中津江村を訪ね、中津江村にあった内容にしていきたいと考えている。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

少子高齢化が進む地域における地域資源の再発見と未来への活用

日本文理大学工学部建築学科　池畑義人・中西章敦

国東市の現状

- 1300年前に神仏習合の地として六郷満山が開かれ、2013年にはため池で形成された里山が世界農業遺産に認定されるなど、豊かな地域資源に恵まれている。
- 人口は23000人で高齢化率は40％を超え、2045年には人口が半減し高齢化率は60％に迫ることが予想されており、少子高齢化による地域の衰退が危惧されている。

国東市安岐町両子地区の位置

七島藺の花

里山林

事業の目的

- 建築学科の学生がフィールドワークにより地域の人との交流を通じて地域の魅力を知る
- グループワークを通じて地域の魅力と課題を分析して、学生ならではの視点で地域資源の維持・活用案を創出する。

スケジュール

7月：学内での調査計画立案
9月：両子寺・ななつむぎ・梅園資料館等の調査
10月：調査結果の取りまとめ・追加調査計画
11月：鬼会保全会・鬼橋などの追加調査
12月～1月：調査結果取りまとめ・提案作成

寺田氏の講話（両子寺）
地域が抱える課題を整理し、国東地区の成り立ちについて学ぶ

七島藺体験(ななつむぎ)
七島藺の歴史と現状について学び、七島藺の加工を体験する

三浦梅園記念館見学
安岐町出身の賢人、三浦梅園の思想を学ぶ。

フィールドワークまとめ
宿泊先で、その日の成果をまとめて翌日の計画を立てる。

修正鬼会保存会取材
修正鬼会保存会の会長宅にうかがって修正鬼会の歴史と現状についてインタビューする。

農業の取材
世界農業遺産協議会会長の林氏宅にうかがって、害虫や人手不足など農業の現状をインタビューする。

鬼橋の調査
両子寺の鬼橋を復元するためのデータ収集のために現地調査を実施して、復元のための基礎資料を作成する。

七島藺トンネルの模型
七島藺のカーボンオフセット機能に着目したサイクリング用トンネルを提案し、その模型を製作した。

現地調査をもとに①両子寺の鬼橋の修復計画、②修正鬼会で学生ができること、③農業の省力化のための技術提案（農業ベンチャー）、④七島藺の活用方法のテーマに取り組んだ。
①鬼橋修復計画は文化財保護と橋としての機能維持が両立できる方法を提案した
②修正鬼会は鬼会自体が中止になってしまい文献調査とインタビューを実施した
③農業ベンチャーはAIの画像認識を使ったゼンマイ栽培効率化の実証実験に挑戦した
④七島藺のカーボンオフセット機能に着目して七島藺をイメージしたサイクリングロードのトンネルを提案した

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.24 回天映像制作＆シンポジウムプロジェクト

日本文理大学／工学部　教授　小島　康史

『回天映像制作＆シンポジウムプロジェクト』

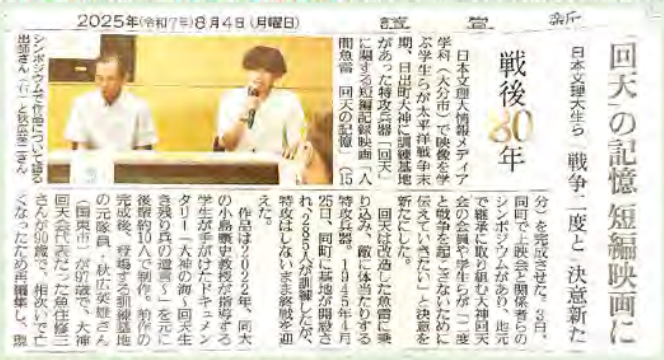
日本文理大学 工学部 情報メディア学科 小島 康史・星芝 貴行 研究室
大分県大分市日出町・大神回天会・ひじ町ツーリズム協会

●事業の目的：大分県日出町大神には、戦争遺構である人間魚雷「回天」の資料や模型を常設展示する「回天大神訓練基地記念公園」があり、日出町を訪れる観光客や地域の小学校の平和教育に利用されている。しかしながら回天についての紹介動画が無いことが課題とされており地域から待望されている。本年は戦後 80 年という節目の年であることから、平和への想いを絶やさないためにも学生と現地を視察して短編動画を制作し、ひじ町ツーリズム協会や地域の小学校での教材に役立てていただくために動画を制作する。さらに完成した動画を、日出町の公民館等で上映・シンポジウムを行うものとしたい。日本文理大学の小島・星芝研究室は映像及び音響制作を専門とするゼミなので、学生から本動画制作の要望が強くあり、またこれまでに制作した動画には回天関係の映像もあることから映像制作は可能である。

●事業の内容：大神回天会およびひじ町ツーリズム協会の協力を得て、人間魚雷「回天」に関する調査を行い、戦後 80 年となるこの年に、生前の方々とその関係者のインタビュー等を行い、撮影と編集を繰り返し、ドキュメンタリー映像「人間魚雷―回天の記憶―」を制作した。2025 年 8 月 3 日（日）に、日出町保健福祉センターの多目的ホールにて、上映会およびシンポジウムを開催した。

制作したドキュメンタリー映像「人間魚雷―回天の記憶―」と 告知ポスター および 大分合同新聞記事

●事業の成果：映像上映には全て字幕を付け、またシンポジウムにも手話通訳者の協力を得て、ろう者にも対応することができた。来場者は想定していた人数の倍以上の 100 名以上となった。実施後、大分合同新聞、読売新聞、熊本県民テレビ、OBS ラジオのメディアにも対応し、来場者を含め多くの方々に戦争や回天の実態を伝えることができた。更に、関係する各学校への DVD 配布も行い、若い世代への戦争の記憶を残すことに期待が出来ることとなった。



実施後に掲載された大分合同新聞記事（左） と 読売新聞記事（右）

熊本県民テレビからの取材（左） と OBS ラジオでの収録（中央） と 制作・配布した DVD（右）

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

NBU 日本文理大学

大分三大竹祭りからはじめるDX化

日本文理大学　工学部　情報メディア学科　濵田研究室

1. 背景　大分三大竹祭りは、日田・臼杵・竹田の地で、毎年11月の2～3日間、夕刻に開催され、それぞれ約10万人以上の来訪者を誇る観光イベントです。現在はボランティアによる誘導のほか、紙のリーフレットやスマートフォン向けマップを併用し情報提供を行っています。

2. 課題と解決策（DX化による展望）　現状の案内手法には、安全性や持続可能性の面で以下のような課題と、それを解決するためのDX化の狙いがあります。

課題（申請時の推測）
・視認性と安全性の不足: 夜間のため紙媒体は見づらく、スマホ画面の注視は混雑した会場での「歩きスマホ」を誘発し、事故の危険性がある。
・案内精度の限界: 土地勘のない訪問者にとって、現在地の把握や展示内容の理解が困難である。
・運営のリソース不足: 人的な後継者・協力者の確保が難しく、多言語対応やオフシーズンでの案内体制も不十分である。

解決策と期待される効果（目的）
講義の演習にて扱う「スマホ向け音声案内システム」を応用し、次の4つの観点の実現を目指します。
【1　安全なナビゲーション】音声ガイドにより、視線を上げたままでの安全な散策をサポートする。**【2　教育的・社会的価値】**高校生・大学生が設計や運営に関わることで、地域課題への理解を深め、実践的なスキルや責任感を養う。**【3　運営の高度化】**ボランティアの研修教材化、多言語化、ペーパーレス化（環境配慮）を推進する。**【4　地域活性化】**単年度で終わらせず、この仕組みを他の観光資源へも転用することで、継続的な地方創生へとつなげる。

3. 課題（ヒアリング等）
企画を元に協議し、課題を再確認した。
・おおむね、推測した課題に対し理解を得た。1地点において、既に11月のイベント用に、同種のWEBサービスを利用予定であるため、展開が困難であることが判明。今年度は、**他の地域資源で利活用の検討できないかという打診をうけました。★**
・測位などに対する人員を割くことが困難。既存のボランティア（高校生など）の対象拡充と、高校などとの協議が必要。

ゼミナール・卒業研究での取り組み　（取組対象学生：12名）
前期期間　5回（6月中旬～7月末）
後期期間　12回（10月初旬～1月中旬）

学内での調査・検証以外の活動（現地による確認・調査）
・電子基準点での誤差確認（EL04931647603 大分など）
・スマートフォンのGPSロガーソフトによる測位と、経路上のブレ把握
・マイコンによるGPSの測位（大分市　南蛮BVNGO交流館　大友氏館跡庭園／亀塚古墳公園・海部古墳資料館／竹田市　岡城址／臼杵市）

4. フィールドワーク等を踏まえ検証し解決した（予定含む）ポイント

【1　安全なナビゲーション】
・音声拡張現実コンテンツ配信システムの選定とカスタマイズ
・AI応用の合成音声生成システムの選定と稼働（日本語）
・GNSS人工衛星「みちびき」を対象とした測位手段確立
・GNSSからのNMEAデータをRDBに収納。各種情報を抽出
・コンテンツ配布サーバの確保と検証

→GNSSによる測位は、使用する機器の誤差や安定度に幅があることを実験で把握し、計測の手段と案内に適したポイントを検討しました。測位の誤差は1m程度を許容範囲とし、みちびきの「サブメータ級測位補強情報」も受信し計測しました。
★竹田市岡城址の計測値を対象に、ポイントを地図上に再現すると、安定しほぼ静止している地点と、ブレが生じている地点が確認されました。（下図）静止している地点は、機器上空に電波を妨げるものが無く、地面も周辺数m程度は平地である傾向が確認されました。ブレが生じているものは、崖壁や崖上の近く、樹木の下がブレの傾向が見られました。
同時に複数のスマートフォンの測位（ブレ具合）も照合し、経路上における案内開始のトリガー範囲（エリア）は、対象地区により調整が必要であることと、設定地点についても誤作動を起こさない地点を選定するなど検討が必要であることが判明しました。
想定している案内システムの骨格が確立し、計測データを元にデモ（検証）が可能です。

【2　教育的・社会的価値】
・GISシステムの調査と地図データの利活用体制の確立
・コンテンツ配信システムの複数メンバでの管理体制検討
→高校生や地域ボランティアの測位体制の方向性と、案内対象地点の決定・記録について地図情報等の権利問題が発生しない体制を確立しました。

【3　運営の高度化】
・全天球カメラによる測位点の記録（VRゴーグルで確認が可能）
・AI応用の合成音声生成システムの選定と稼働（海外向け）
・市役所内でのイベント担当部署をはじめ、同システムを利活用できる対象の拡充と、利用促進（方法）について検討が必要（予定）

【4　地域活性化】
・複数の年度で取組むようにし、他の対象でも展開できるなど、同じ仕組みを用いて継続的な活動に体制などのスキームを整備する。（予定）
・地域の観光・教育資源を、ボランティア（地域の高校生なども含む）・市（実行委員含む）・大学　などが適切に関与し、継続的に発展振興できるようなシステムの維持・管理（利用推進）を目指す（予定）
・現在導入している合成音声（多言語）システムは、非営利・教育向けであるため、営利利用などが可能なシステムに更新する予定（検証まち）

図　岡城址のGNSS測位　GoogleMapのマイマップ
（緑：スマートフォンの行動軌跡　赤点：測位10秒ごと）

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

おおいた地域連携プラットフォーム 令和7年度 フィールドワーク支援事業 実施報告

大分県下の飲食・宿泊事業者に向けた食物アレルギー対応推進事業

別府大学 食物栄養科学部 食物栄養学科
学生チーム 4年生 末光 乃彩／笠木 愛郁／後藤 菜々海／安東 里奈／平岡 美沙希
教授 高松 伸枝

1. 地域課題と事業目的

【地域課題】
- 食物アレルギー児の増加と県下の専門医不足
- 県下事業者のアレルギー対応経験の不足
- 事業者側の食品表示漏れや誤食事故の懸念

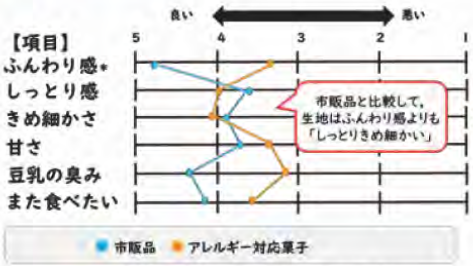
【目的】
学生主体での実態調査により課題を可視化し、菓子店と連携した「モデルケース」の提示を通じて、県内事業者のアレルギー対策を支援する。

2. 菓子店連携による商品開発

玖珠町「お菓子の家えいらく」との共同研究

① シフォンケーキの開発
原因食物として頻度の高い卵・乳・小麦を大豆・米粉に代替。ミルクフォーマーによる泡立てで、従来のハンドミキサーに比較して「きめの細かい気泡」を実現。小型で焼成して高さを確保。

② カヌレの開発
米粉に「上新粉」を配合し、生地内部のモチモチした食感と、外側のカリッとした香ばしさを両立。鉄製型を使用し、外観の濃褐色と光沢を再現。



嗜好調査 (シフォンケーキ：SD法)
一元配置分散分析 Dunnett法 両側検定 ＊p＜0.05

3. 試食・交流会を通じたニーズ把握

対象: 高校生、大分市補助事業料理教室参加の食物アレルギー児と家族

結果: 「ふわふわしたケーキだった」「初めてカヌレを食べた」など、心理的不安なく食べられる喜びを共有できた。

4. 県内飲食・宿泊事業者の現状

【対応の課題】
75.0% 正確な情報提供（原材料把握）

【求められる支援】
77.8% 業界内の対応マニュアルの整備

【その他の知見】
座席数の多い店舗ほど対応への意識が高い傾向が見られた（Sperman順位相関係数 p=0.038）。一方、店舗独自のレシピにより食材公開を躊躇する意見も聞かれ、実情に即した支援が必要と考えられた。

5. 地域への成果と展望

① 事業者向け講習会（11月4日）
大分県食品衛生協会主催の講習会を行なった。例年を超える120名以上が参加し満席となった。「食品表示法」や「インシデント低減化」の講義を行い、モデルケースを共有した。

② 情報発信・広報
大学HP、SNSでの発信に加え、交流会や講習会ではフライヤーを作成し、広く周知を行った。

★ 社会実装への一歩
来年度大分県発行の飲食・宿泊事業者向け「food Allergyサポートブック」改訂版に本成果の組込みが決定。

連携体制・活動地域

【企業・団体】
- お菓子の家えいらく（玖珠町）
- 玖珠町商工会
- (一社)大分県食品衛生協会（大分市）

【自治体】
- 大分県生活環境部食品・生活衛生課
- 大分市子育て支援課

【活動地域】
大分県玖珠町、大分市、別府市

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

重光家住宅主屋の廃業味噌蔵からの蔵つき微生物の探索とその有効利用

別府大学／食物栄養科学部　教授　陶山　明子

おおいた地域連携プラットフォーム 令和７年度 フィールドワーク支援事業

重光家住宅主屋の廃業味噌蔵からの蔵つき微生物の探索とその有効利用

別府大学 食物栄養科学部 発酵食品学科・別府大学大学院 食物栄養科学研究科
参加学生：多川優也（修士２年）、学部学生７名　担当教員：陶山明子

【背景】

大分県国東市の有形文化財の重光家住宅は、江戸中期～昭和初期まで使われた味噌蔵が現存し、当時の製造道具も残されている。重光宏哉氏は蔵付き酵母を活用し、伝統味噌の復活を希望している。本研究は蔵内の微生物を単離・同定、その性質を解明し、将来的に国東市を活性化する為の活用方法を探求する。

↑写真1 冬の国東

←資料１ 敷地内には江戸中期築の味噌蔵が現存。大桶2つ・小桶7つ等、味噌づくりの道具が保管。

写真2 当時の重光家は七東藩や海運を中心に国東半島を支えた →

←写真3 採取場所を検討
定期的に重光氏と意見交換や調査進捗について報告を実施

↑写真4 大桶が2つ並ぶ人とサイズを比較するとその大きさが良く分かる。

【目的】

1. 地域の現状と課題
- 文化財の味噌蔵が90年以上未活用。
- 地域の味噌づくりが途絶え、発酵文化の衰退。
- 国東市の人口減少により、産業の担い手不足。

2. 本事業のアプローチ
- 蔵に残る微生物を探索・単離。
- 文献情報をもとに、単離した微生物の安全性や発酵特性を整理

3. 目的と展望
- 歴史×科学で、文化財に新たな価値を創出。
- 「発酵文化の町・国東」としてブランド化、観光誘致を強化。
- 学生の参画を通じ地域理解、担い手育成。

【結論】

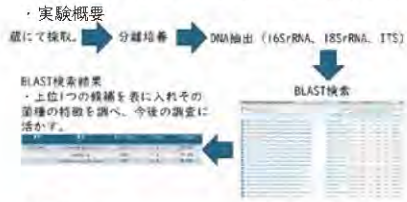
今回の調査では、耐塩性・高浸透圧耐性・香気生成・アルコール発酵・キシロース利用能など、多様な特性をもつ菌種が確認された。中には味噌や醤油の熟成に寄与する菌や、逆に食品利用に適さない日和見感染菌も含まれていた。今後の調査でより詳しく菌種を同定すると共に今まで以上に連携を密にとりながら次年度も調査を行う必要がある。

【手法、結果と考察】

i）実験方法

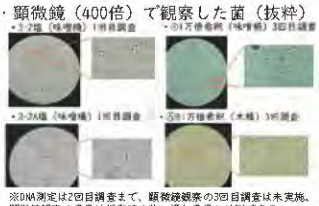
蔵内の各地点から採取したサンプルを、有塩（10%）・無塩の2種類の培地で嫌気培養し、耐塩性を含む微生物を分離した。分離株はDNAを抽出してBLAST解析により菌種を同定し、醸造への関与や有用性についても学術的に評価した。

・実験概要



↑写真5）残った味噌や醸造道具、蔵の壁からも採取

・顕微鏡（400倍）で観察した菌（抜粋）

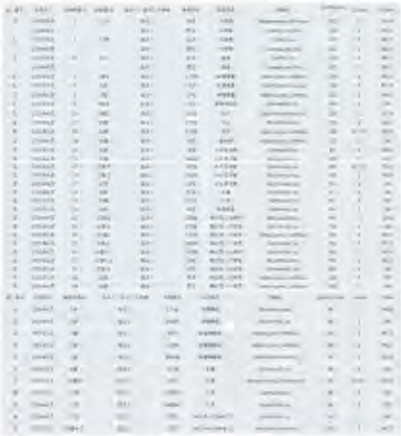


※DNA測定は2回目調査まで、顕微鏡観察の3回目調査は未実施。
顕微鏡観察の番号は採取時の物、通し番号とは別である。

ii）実験結果

今回見つかった主な菌種とその特徴

- *Stephanoascus farinosus*
  特徴：耐塩性。味噌や醤油醪など高塩濃度環境からも分離。
- *Starmerella sp.*
  特徴：高浸透圧耐性。高糖環境での生育に適応。発酵過程でコク味等を生産する種も存在。
- *Saccharomyces* sp.
  特徴：*Saccharomyces* 属には醸造に利用される発酵性酵母が含まれる。
- *Meyerozyma guilliermondii*
  特徴：酢酸エステル類などの香気成分生成の報告がある。キシロースを資化できる株がある。
- *Meyerozyma caribbica*
  特徴：β-グルコシダーゼ活性を示す株があり、香気前駆体の転換に関与するとされる。キシロースを資化できる株がある。
- *Blastobotrys* sp.
  特徴：耐熱性や耐浸透圧性を示す株があり、有機物分解能が報告されることがある。
- *Candida* sp.
  特徴：有用菌から日和見感染菌まで様々。 *Candida versatilis* などの耐塩性酵母は高塩濃度下でも生育し、発酵・熟成過程において香気成分の形成に寄与する可能性がある。
- *Candida mucifera*
  特徴：臨床分離例の報告がある酵母群に近縁であり、食品利用の安全性が確立していないため、食品用途には使用しない。



VI）今後の展望

- 本研究により複数の蔵付き微生物が分離・同定されたが、未評価の菌株も多く、**今後も継続的な研究が必要である。**
- 現在も、新たに採取した試料について培養・観察を継続しており、**新たに単離した微生物について特に注目して解析を進めている。**
- 今後は、分離された酵母について
  ① 食品としての安全性評価
  ② 香気成分への寄与
  ③ 代謝特性の解析
  ④ 味噌の熟成過程への影響
  を中心に検討を行う。
- 継続的に重光氏と連絡を取り合い、研究につながる**味噌づくりの資料発見、蔵の見学をはじめ、国東半島についての理解促進**を検討している。

←写真6）重光氏と味噌づくり体験を行う様子

↑写真7）重光氏と採取した菌の様子を観察

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

規格外トマトの有効利用－トマト酢の商品開発

別府大学 食物栄養科学部　発酵食品学科

地域が抱える課題

フードロス
・トマトの生産過程で摘果した未成熟の青い実や収穫後の傷のある赤い実が多く廃棄されている。
・気候変動による高温や長雨の影響などによる病害虫の発生リスク

目的

・摘果した未成熟トマトや収穫後の傷があるトマトの廃棄ロスを低減し有効利用するために、それらのトマトを加工したトマト酢を製造する。
・「もったいない」を「価値」に変える地域資源循環を目指す。

事業内容

＜活動体制＞

【活動地域】 竹田市を予定
【参加学生】 別府大学 食物栄養科学部 発酵食品学科　4年(9名)
【参加教員】 発酵食品学科・陶山明子

＜トマト酢の製造＞

分析項目
✓機能性：抗酸化作用、血圧上昇抑制　✓嗜好性：味認識装置　✓香り：香気成分分析

＜抗酸化作用＞

活性酸素を除去し、老化防止やストレス軽減に寄与する力

考察
高い抗酸化作用を保持

＜味の数値化＞

考察
九州：酸味が際立ち、キレのあるフレッシュな味わい
東北：旨味が強く、まろやか

＜血圧上昇抑制（ACE阻害）効果＞

アンジオテンシンⅡの生成を阻害し、血圧の上昇を抑制する働き

地域別 ACE阻害効果

効果あり（Positive）：
- 青森 (13.5%)
- 北海道 (0.3%)

効果なし（ND）：
- 大分
- 熊本

考察
産地間で血圧上昇抑制作用に差異が認められた。原料トマトの品種の違いや栽培環境条件の差異が影響している可能性が考えられる。

＜考察：大分県産トマト酢の特徴＞

料理を引き立てる「キレ」と「香り」

料理を引き立てる「プレミアム調味料」を目指す

＜香気成分分析＞

検証と反省

検証と反省：
- 本来は地域連携を並行すべきであったが、まずは「醸造が技術的に可能か」という基礎的検証（発酵の科学）を最優先とした。
- 醸造試験と分析に時間を要し、1月末の完了となったため、地域対象者との十分な協議の機会を確保できなかったことが最大の反省点である。

連携：
今回の結果をもとに、地域対象者との連携を目指す。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

インバウンドビジネスへの対応に向けた「昭和の町」国際化プロジェクト

指導教員：大分県立芸術文化短期大学　国際総合学科　専任講師　秋庭　淳志
協　　力：豊後高田市、特定非営利活動法人大学コンソーシアムおおいた

地域課題

本事業で着目した**地域課題は、インバウンド需要の獲得に向けた「インバウンド観光客のターゲット設定」と「観光消費を促す仕組みづくり」**となる。なお、国ごとに観光スタイルや消費動向などが異なるため、地域課題解決の方向性を探るためには、ターゲットの設定が求められる。

外国人観光客数が回復していない
⇩
【課題①】インバウンド観光客のターゲット設定

【コロナ前との観光客数比較】
国内観光客：約81.7%
外国人観光客：約56.1%
（出典）豊後高田市ホームページ掲載「市勢概要」豊後高田市のすがた（令和6年）

＋

観光消費額が伸び悩んでいる
⇩
【課題②】観光消費を促す仕組みづくり

【一人あたりの観光消費額】
約2,054円
（出典）豊後高田市地域経済循環分析「豊後高田昭和の町インバウンドインバウンド観光客の消費動向について」

事業目的

本事業の**目的は、インバウンド需要の獲得を見据え、市内のインバウンド対応の実態を把握し、多言語対応等に関わる課題を明らかにすること**である。

そのために、豊後高田昭和の町にて多言語対応等の実態を把握する店舗調査を実施した。また、インバウンド観光客に見立てた留学生の行動を観察する調査等も併せて行った。

【目的】
インバウンド対応の実態と課題の把握

- **【手段(調査)①】** 多言語対応などの実態把握を目的とした店舗調査
- **【手段(調査)②】** インバウンド観光客に見立てた留学生の行動観察

事業内容

本事業では、学生がマーケティング調査に関わる知識などを習得し、豊後高田市の事前学習を行った後、3回にわたりフィールドワークを実施した。第1回目は豊後高田昭和の町に立地する店舗にてインタビュー調査を行い、インバウンド観光客の消費動向を調査した。第2回目の調査では、店舗調査および留学生の行動観察調査を実施し、昭和の町における多言語対応等の実態を把握した。第3回目のフィールドワークは、多言語対応等に関わる実践知の獲得を目的として、インバウンド対応が進んでいる別府市にて調査を実施した。

なお、フィールドワークに参加するにあたり、学生は各種調査の項目を設計した。また、調査実施後は、その結果を取りまとめ、現状と課題を整理するとともに、豊後高田市への提案内容を検討した。その提案には、インバウンドビジネスへの対応において、特に優先すべき点が盛り込まれている。

【活動の流れ】

1. マーケティング調査に関わる知識等の習得／豊後高田市の事前学習
2. 第1回フィールドワーク（豊後高田市）／店舗へのインタビュー調査
3. 第2回フィールドワーク(豊後高田市)／店舗調査・留学生の行動観察
4. 第3回フィールドワーク(別府市)／インバウンド対応の実践知獲得
5. 豊後高田昭和の町における現状と課題の整理／提案内容の検討

地域への成果

地域への成果としては、インバウンド対応の課題が明らかになったため、高い効果が見込まれる施策を立案しやすくなった点などが挙げられる。なお、これらの課題の背景には、インバウンド観光客の購買を阻害する複数の要因が存在している。そのため、課題を解決することで入店率や購買率の向上等、店舗の売上に直結する効果が期待できるため、その対応が求められる。

【インバウンド対応の課題】

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

令和７年度 フィールドワーク支援事業

府内藩の名産品再興を通じた国東七島藺の持続可能な活用と伝統産業の活性化

申請者：大分県立芸術文化短期大学　講師　堤　亮介　連携：七島藺工房ななつむぎ　岩切 千佳 氏

対象地域の課題点（国東市・大分市）

大分県国東半島の特産品である七島藺は、生産者の高齢化や後継者不足により生産量が減少しており、生産・加工技術の継承が喫緊の課題となっている。また、かつて府内藩政下で盛んに生産されていた歴史を有するにもかかわらず、現在の大分市では七島藺に関する文化的記憶や認知がほぼ失われており、地域資源として十分に活用されていない状況にある。

【事業目的】

本事業は、国東地域の七島藺生産者と連携し、七島藺の歴史的背景および伝統的な生産・加工技術を学ぶとともに、大分市の歴史文化や先人・橋本五郎左衛門の功績に着目した普及活動および観光商品開発を行うことを目的とする。
併せて、七島藺を地域資源として再評価し、新たな販路開拓を通じて生産者・加工業者の所得向上を図るとともに、大分市における農業文化の保存・継承に資することを目指すこととする。

写真1　岩切千佳氏と七島藺の田んぼ

写真2　岩切千佳氏の工房「ななつむぎ」

【課題解決に資すると考えられる事業】

1.七島藺に関する認知調査および活用アイデアの収集
2.七島藺の生産・加工現場の実地調査および体験学習
3.七島藺の歴史的調査および文化資源としての再評価
4.七島藺残渣を活用した循環型商品開発の試行
5.七島藺の普及活動

【実施事業】

・七島藺の認知度調査実施（学内アンケート調査の実施）
・七島藺工房「ななつむぎ」訪問（栽培・加工・観光施策）
・府内藩近隣の七島藺調査（先哲資料館・現地訪問・聞取り）
・七島藺の知名度向上（文化フェス企画・広報活動）
・ストーリー性強化（サンプリング調査とDNA分析）
・残渣を用いた商品考案（線香・染物・紙）

事業の成果とまとめ

写真2～5　実施した事業の様子

【七島藺DNA分析実施中】

橋本五郎左衛門が七島藺を豊後へ伝えたとする民俗伝承について、DNA分析により科学的に検証し、その歴史的信頼性を高めようと、鹿児島大学においてサンプリング調査を実施した。現在、分析結果の報告を待っている段階である。

2025.8.3　TOSニュース

2025.11.22　大分合同新聞　岩切氏・大学インスタ等

【まとめ】

本事業では、七島藺を対象に、認知調査、生産・加工現場の調査、歴史的検証、残渣活用の試作を通じて、その文化的・産業的価値の再評価を行った。学生の調査・実践を通じて若年層の認知状況や課題を把握するとともに、七島藺が信仰や地域文化と結びつきながら継承されてきた背景を明らかにした。さらに、文献・伝承・科学的分析を組み合わせることで、七島藺の伝来や活用を裏付ける基盤を整えた。これらの成果は、今後の文化発信や観光・商品開発へと展開するための基礎的知見となるものであり、県助成により進められている「府内祇園会」の復元と組み合わせた活用が、国東七島藺を大分市においても持続的に活用し、地域資源として定着させていく上での鍵を握ると考えられる。今後も、現地の七島藺農家および岩切氏と連携を図りながら、実現に向けて取組みを継続していきたい。

【事業の発信】

本事業による取組は、マスメディアやSNS等を通じて積極的に発信し、地域内外への周知を図った。

◆ 大分県立芸術文化短期大学　歴史観光学研究室（堤ゼミ）◆　TEL：097-545-4564　Email：r-tsutsumi@oita-pjc.ac.jp

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.31 多文化共生防災ワークショップ：外国人住民とともに学び合う、災害時の健康と生活への備え

大分大学／医学部　教授　井上　亮

令和7年度 フィールドワーク支援事業報告（大分地域連携プラットフォーム）

多文化共生防災教育プログラム
－ワークショップ　多文化共生で考える防災と健康問題－

企画・統括・運営・実施：大分大学医学部看護学科専門科目「国際医療・看護論」
実践看護学講座　井上　亮・基盤看護学講座　金崎理子・非常勤講師　原田千鶴
ワークショップファシリテーター：
大分大学災害看護研究チーム：佐藤祐貴子・安藤敬子・簀河原靖子
連携機関：明日香学園・大分市企画部国際課

Ⅰ.地域が抱える課題と本事業の目的

1.地域課題
・多文化共生は進む一方、平時の交流・相互理解の機会は限られる。
・異なる言語や文化の違いは、災害時の防災情報・支援へのアクセス格差が生じやすい。

2.本事業の目的
「防災」を共通テーマに、留学生と日本人学生が協働して学ぶ場を創出し、多文化間の「相互理解」と「共助意識」を育成する。

Ⅱ.本事業の全体像

正課科目と地域課題が接続する一体型プログラム

事前　◆医学部看護学科３年次選択科目「国際医療・看護論」の履修
中核　ワークショップ「多文化共生で考える防災と健康問題」
事後　振り返り：防災・多文化共生に関する認識

Ⅲ.多文化共生防災ワークショップ

1．実施日：2025年10月28日（火）
2．会　場：ホルトホール大分（会議室）
3．参加者
◆ 大分大学看護学科　国際医療・看護論履修3年生12名
◆県内専門学校　留学生　　1年生33名
4．実施体制：科目担当教員+災害看護研究チーム
5．ワークショップのねらい
・防災・避難生活を理解し防災時求められる自助・共助の行動を考える
・多様な文化背景をもつ人々と共生する視点を対話を通して学ぶ

表１　各グループが選択した１０アイテム

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
convenience store part-time job	水	スマートフォン	身分証明書	非常食	衛生用品一式	お金（現金）	電池・充電器	処方薬・常備薬	トイレットペーパー	SC: tobacco
Sake	水	非常食	救急箱	スマートフォン	電池・充電器	身分証明書	衛生用品一式	お金（現金）	ライター	古新聞
Karaage	水	非常食	処方薬・常備薬	スマートフォン	身分証明書	衛生用品一式	交換下着	お金（現金）	電池・充電器	SC：シート
Volleyball Love	水	非常食	スマートフォン	救急箱	電池・充電器	衛生用品一式	身分証明書	トイレットペーパー	交換下着	雨具
Three siblings	水	非常食	スマートフォン	衛生用品一式	救急箱	身分証明書	お金（現金）	電池・充電器	処方薬・常備薬	ビニール袋
Ramen	水	非常食	お薬手帳	救急箱	携帯ラジオ	身分証明書	お金（現金）	スマートフォン	交換下着	電池・充電器

6．ワークショップの構成内容
1部　演習導入ミニレクチャー(30分) 災害の基本的知
2部　グループワーク(50分)
テーマ「災害時に３日間生き抜くための非常持ち出し10アイテム」のグループ選定

7．振り返り（アンケート調査）（１０分）

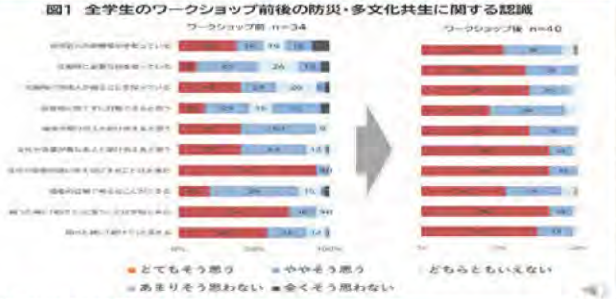
やさしい日本語とイラストの教材

言語の課題もあったが、お互いが伝えよう、理解しようとコミュニケーションを工夫していた。

発表の様子。それぞれのグループの発表を聞いて、自グループとの違いに驚きや笑いの声が聴かれた。

Ⅳ.ワークショップ前後の学生の反応

図1　全学生のワークショップ前後の防災・多文化共生に関する認識



1．参加学生の防災・多文化共生に関する認識の変化（図１）
災害時の行動や備えに対する理解が深まり、慌てずに行動できるという認識が向上した。さらに、文化や言語の違いを前提とした相互扶助や、困ったときに助けを求められるといった項目においても、肯定的回答が増加した。

2．国際医療・看護論履修学生学び
看護学生の学びの自由記述から、文化や価値観の違いへの気づきが看護観の拡張につながったことが示されていた。学生は、文化的安全性や一方的な「正しさ」を押しつけない姿勢の重要性を、留学生との対話を通して実感的に理解していた。その結果、多文化共生を支える態度への理解が深まり、国際看護やグローバルな健康課題への関心へと学びが発展していた。

Ⅴ．本事業の評価

本支援事業により、災害時の行動や避難生活への理解が深まり、不安の軽減と行動への自信が認められた。また、文化や価値観の違いを前提とした対話を通じて、相互の信頼感が育まれ、地域の一員としての認識が共有された。これらの成果から、平時の対話と協働の場が創出され、事業目的は概ね達成された.

謝　辞

本事業の実施にあたり、明日香学園ならびに大分市企画部国際課の皆様、また学内の災害看護研究チームよりご理解とご協力を賜りました。地域の関係機関との協働を通じて、多文化共生を地域防災の実践として学ぶ貴重な機会を得られたことに、心より感謝申し上げます。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

おおいた地域連携プラットフォーム　実践型地域活動事業

地域DX に向けた昼夜マッピングパーティによる 地域課題の可視化レポートの作成

亀井唯斗　首藤尚熙　福澤拓実　吉田悠哉　松浪早希　賀川経夫
（大分大学理工学部理工学科知能情報システムプログラム，大分大学大学院理工学研究科）
協力：大分市春日地区自治委員　Code for Oita

背景・プロジェクトの目的

- 地域DXの重要性が高まる一方で，地域の日常的な課題や気づきは十分に共有・蓄積されていないといった課題があります。
- 本プロジェクトでは，大分市春日地区を対象に，地域住民と学生が協働して地域を歩き，地図を用いて地域の課題や気づきを可視化する「マッピングパーティ」を実施しました。特に今回は，昼と夜の2つの時間帯で調査を行い，その環境の違いにも着目しました。

プロジェクトの実施内容

マッピングパーティ・アイデアソン

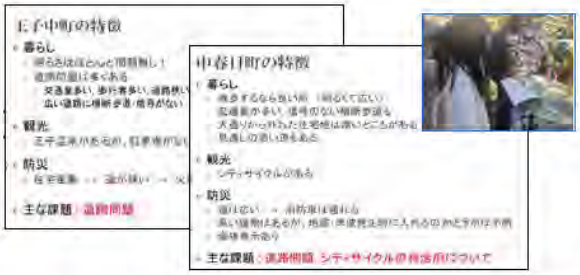
- 誰でも編集可能な地図のオープンデータである OpenStreetMap を活用し，対象地域を歩きながら調査を行うマッピングパーティを，昼と夜の2つの時間帯で実施しました。
- 昼の部では，大分市春日地区において地域の方々とともに散策を行い，気づいた点を地図上に集約しました。夜の部では，昼の調査で街灯などが気になった場所を中心に，改めて調査を行いました。

- Open Street Mapの充実化

実施前　　実施後

レポートの作成

- マッピングパーティで集約された様々な意見をまとめて，地域の日常的な問題点と改善案を検討し，レポートを作成して当該地域の方に配布いたしました。



地区の方からいただいた意見

- 地域を改めて見直すよい機会になった
- 活動の目的や意義が分かりやすかった
- 地元とは異なる視点からの意見が参考になった
- 昼夜の2つの時間帯での実施は，安全・防災の観点から有効であった
- 一方，活動内容や成果の地域への還元方法が分かりづらいとの意見や，継続的な取り組みへの課題も挙げられた

まとめと今後の課題

- マッピングパーティを通じて，地域の日常的な課題の発見に取り組みました。地域の方々の協力のもと，有意義な活動を実施することができ，その成果をレポートとして取りまとめ，地区の方々へ共有しました。その結果，多様な意見や示唆を得ることができました。
- 今後は，これらの意見を踏まえ，単発的なイベントにとどまらず，地域内で課題や情報を継続的に共有する仕組みについて検討していきます。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.33 地域連携によるSTEAM教育ワークショップの指導者育成

大分大学／教育学部　教授　市原　靖士

本事業の成果

昨年同様,本事業の課題としてSTEAM教育の指導できる人材の育成,育成の際実践できる場の提供,地域の児童生徒に対するワークショップの場の提供があげられる。人材の育成としては参加者を公募しある程度の人数が参加し指導者を育成することができた。参加者の反応としては,「教育実習では体験できない児童生徒への指導体験ができた」「授業づくりのヒントになる」「来年も同様な取り組みがあれば参加したい」「教員になった場合でも十分活かすことのできるスキル等身につけることができた」等の反応が多くあった。ワークショップに参加した児童生徒からは,「学校でのものづくりではできないので良かった」「ロボットプログラミングなど初めて体験できて楽しかった」「楽しく学べた」「学校ではできないことが時間をかけてできた」「大学生の人が優しく教えてくれてうれしかった」「科学技術について興味が高まった」「また,参加したい」などほとんどが肯定的な反応であった。学生が指導中心になった時でも同様な反応であり「やさしくわかりやく教えてもらえた」など指導に関しても教員と同等なほどスキルが身についていると考えた。

おおいた地域連携プラットフォーム 令和7年度 フィールドワーク支援事業 実施報告書

地域連携によるSTEAM教育ワークショップと指導者の育成

大分大学教育学部　市原靖士

本取組の概要

前年度同様,学生とは日出,国東,大分市,別府市等に出向き地域での課題（STEAM教育に関する指導者不足と子どもたちに対してのワークショップがないといった点）について現場の声を聞き意見交流をはかった。特に,STEAM教育の細かいどんなニーズがあるか,指導者への要望等を聞き課題解決への一助とした。昨年度も参加した学生が数名おりその学生については,大学教員の支援なしの自律的なワークショップ講師をするための手立てを考えた。また,本年度初めて参加する学生による課題解決に向けた検討や活動としては,現地視察をした後,それらを反映した基本的な指導者としての知識技能について講義を行った。また,学生をグループに分けて課題解決についてディスカッションし意見交流をはかりながらより良い解決策について検討をおこなった。また,昨年の模擬指導の動画などをお手本として使用した後,模擬指導を学生にしてもらい動画等で撮影しどこが良いか,どこが悪いかなど振り返りをし,改善をはかった。ワークショップについては現時点で６２回開催することができ学生には指導者として場を提供することができた。学生からは,実際に子どもたちに対峙して指導する体験は自身の指導スキルアップに大変寄与したとの意見が多くでた。地域の子どもたちにもSTEAM教育ワークショップで学ぶ場を提供できた。（日出児童館６回参加児童１５名＊６　９０名（予定）関崎海星館２４回参加児童１５名＊２４　１８０名（予定）O-Lab４回参加児童５０名　豊後高田市　１０名＊２回　国東市　１０名＊２回　おおいたサイエンスフェスタ　１０名＊５回　津久見市　１０名＊２回　別府市もの

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

2025年度おおいた地域連携プラットフォーム フィールドワーク支援事業報告

つながる健康・ひろがる共生
―すこやかな多文化共生の地域づくり事業―

大分県立看護科学大学　看護学部2年次生　阿部なるみ, 佐藤いずみ, 渡邊さくら
国際看護学研究室　学内講師　篠原 彩
教　授　桑野紀子

背景

□豊後大野市は、
- 高齢化率が45.8%　2025年5月末時点
- 自治会のうち、半数以上が高齢化率50%を超え、中には80%を超える自治会もあり、地域の担い手不足が深刻
- 地域産業や社会活動を支える存在として、外国人労働者への期待が高まっている

□豊後大野市の在留外国人は、
- 人口の約1%程度だが、近年増加傾向
- 外国人労働者は、保健医療・生活支援など公的サービスにアクセスしづらい
- 地域では見えにくい存在で、交流機会が少なく、孤独や健康不安を抱えやすい

目的

外国人労働者および地域住民を対象とした健康チェックや健康教室を実施し、共に健康づくりを行う機会を提供する。

つながる健康・ひろがる共生
―すこやかな多文化共生の地域づくり事業―

➢外国人労働者が地域の一員として健康に安心して暮らせる環境づくりを推進
➢地域住民との相互理解と多文化共生の促進

実施体制

豊後大野市　市民団体グローカルおおの　代表者 森美由紀 様
多文化共生イベント「カルバレ」の場を活用させていただいた

大分県立看護科学大学
- 国際看護学概論を履修した学生有志　10名
- 国際看護学研究室　学内講師 篠原 彩
  教　授　桑野紀子

実施内容

外国人労働者と地域住民との交流会　7月
参加学生 5名（2年2名, 3年3名）
- イベントのお手伝い
- 健康チェック（血圧測定）
- 熱中症に関する多言語パンフレット配布

出典 熱中症予防, https://www.city.ushomi.lg.jp/

多言語で資料を作成

イスラム教文化に関する講和　9月
参加学生 2名（2年）
- イベントのお手伝い
- 地域住民とともに講和の聴講

宗教を含む文化を知ることは、互いに暮らしやすい環境づくりにつながる

実施内容

女性外国人労働者の皆さんへの健康教室　10月
参加学生 5名（2年3名, 4年2名）
- 健康教室「看護学生と性と健康について話しましょう」の実施

➢日本語とともに多言語で資料を作成
➢漢字にはふりがな
➢月経の仕組みや月経周期、性感染症について説明

- やさしい日本語を用いて説明
- 説明箇所を示し、翻訳資料で確認できるように工夫
- 資料を一緒に確認し、情報を共有

就労生活や健康を害した時期もあったこと等、様々なお話を聞くことができた

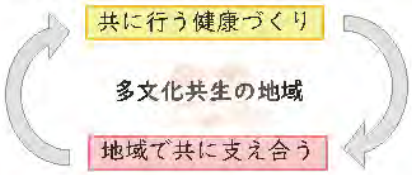
外国人労働者と地域住民との交流会　11月
参加学生 3名（2年）
- イベントのお手伝い
- 健康チェック（血圧測定）
- インフルエンザに関する資料の配布

文化の共有機会は、心の安寧にもつながる

事業成果

◆イベントを活用した健康情報の発信
◆健康チェックの実施による健康意識の喚起
◆地域に暮らす女性外国人労働者の健康意識の醸成

地域の一員として



事業を通した学び

○文化や言語の違いによる伝え方の難しさへの理解
○外国人労働者が抱える精神的ストレスへの理解の深化
○外国人労働者の背景や生活状況を踏まえた健康支援の必要性
○多文化共生には「理解」よりも、「理解しようとする姿勢」が重要

座学での学びを深め、新たな気づきを得ることができた

Oita University of Nursing and Health Sciences

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

日本文理大学／工学部　准教授　松原　かおり

学生と描く臼杵の物語
ー　観光映像を通じた地域共創プロジェクト　ー

1. 背景・課題

臼杵市には、国指定天然記念物である風連鍾乳洞をはじめ、歴史的建造物、食文化、自然景観など多様な観光資源が存在する。

しかし、それらの魅力は断片的に紹介されることが多く、ストーリー性をもって体験的に伝える観光映像の整備は十分に進んでいない。

また、近年の観光プロモーションでは、SNSや動画配信プラットフォームを通じた映像発信が重要視されている一方、若者視点を活かした企画・制作が地域内で行われる機会は限られている。

2. 目的

本事業は、学生による観光映像制作を通して、地域資源の新たな捉え直しと発信の可能性を探ることを目的とする。

- 若者の視点による地域資源の再発見
- 映像表現を通じた体験的・感覚的な観光表現
- 地域と学生が学び合う共創的な実践

3. 事業概要

- 実施主体：日本文理大学 情報メディア学科 松原研究室
- 対象：情報メディア学科 3年次ゼミ生 8名
- フィールド：大分県臼杵市

- 観光映像の企画・制作
- 上映会の実施
- 来場者アンケートによる評価・振り返り

4. 制作プロセス

① 事前準備
- 企画・テーマ検討
- 教員による事前ロケハン
- 撮影方針の共有

② 撮影・表現
- 監督：岡本 純
- 撮影・編集：亀井 彪斗
- 出演：亀井 真斗 ほか

天候や現地の空気感を踏まえ、学生間で相談しながら撮影内容を判断

③ 音楽制作
- 学生によるオリジナル楽曲を制作
- 撮影後、映像素材をもとに作曲
- 映像と音の関係性を重視した表現を試みた

5. 上映会の実施

- 会場：臼杵市民会館 小ホール
- 延べ参加人数：24名
- アンケート回答数：18件
- 来場者：文化施設関係者・地域の高齢者
  臼杵市職員・臼杵市長

上映後には、来場者から直接、映像に対する感想や意見を聞く機会を設けた。

上映会告知ポスター

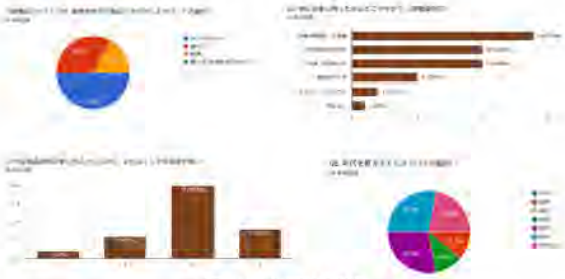
大分合同新聞に掲載

6. 結果・考察

アンケート結果から、映像の雰囲気や空気感、臼杵の風景の見せ方、音楽の使い方が高く評価された。

一方で、ナレーションや文字量に関する意見もあり、世代によって映像の受け取り方が異なることが明らかになった。

これにより、「誰に向けて、どのように伝えるのか」という観光映像制作における重要な視点を学生自身が認識する機会となった。


アンケート結果抜粋

7. まとめ

臼杵市民会館小ホールでの上映会風景

本事業は、観光映像を通じて地域と学生が関わり合う共創的実践の試みである。学生にとっては、地域資源の捉え直しや映像表現の社会的役割を学ぶ場となり、地域にとっては、外部視点による魅力の再構築と新たな発信の可能性を探る機会となった。

今後は、本事業で得られた知見をもとに、表現や構成をさらにブラッシュアップし、より多様な観光映像制作へと展開していきたい。

日本文理大学　工学部　情報メディア学科　松原研究室

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

ガストロノミーツーリズムによる地域活性化とまちあるきガイド人材育成事業

別府大学／国際経営学部　講師　小野　貴史

ガストロノミーツーリズムによる地域活性化とまちあるきガイド人材育成事業

別府大学 国際経営学部国際経営学科　講師：小野貴史
学生：平林那菜　小森優那　渡邊結愛　池田博貴　谷山須奈央　寺本弥真斗　豊田格己
羽田野秀剛　松田玲也　中山修也　パモド・マドゥランガ　姜　大豪

●ガストロノミーツーリズムとは

その土地の気候や風土が育んだ食材、食習慣、伝統、歴史などを通じて「食文化」を体験・享受することを目的とした観光である。単なる飲食にとどまらず、地域の暮らしや文化、自然とのつながりを深く理解する旅の形として注目されている。観光庁はこの分野を、インバウンド誘客や地方創生の有力な手段と位置づけ、地域資源を活かした高付加価値な食体験の創出を支援している。地域の農業・漁業・飲食業・宿泊業など多様な関係者が連携し、経済波及効果を地域全体に広げることが期待されている。

1.背景と目的

地域課題

別府観光の魅力である「まちあるきガイド」の高齢化と後継者不足

本事業の目的

- 若者（学生）の視点を取り入れた「新コース」の造成
- 「歩く」だけでなく、実際に「ガイド」を行うことによる実践的人材育成
- 「食（ガストロノミー）」と「観光」を掛け合わせた高付加価値化

ONSEN・ガストロノミーツーリズム

地域コンテンツの“点”を“面”に変え、地域に長期滞在させることが必要
➡ 有効な解決策のひとつが「ガストロノミーツーリズム」

温泉旅館という“点”を温泉地という“面”に変え、
地域の食、酒、歴史、文化に触れ、長期滞在者やリピーターを増やす

有効な解決策のひとつが
「onsen・ガストロノミーツーリズム」

提供される食は当該地域内で生産・調理（地域の農産物等を買い上げ、地元の料理人等が調理）される地産地消のものを使用

「つなぐ」ための核＝別府ガストロノミー

- 課題：「温泉都市（扇状地）」と「棚田（山間部）」をどうつなぐか？
  - ＝「静的癒やし」と「動的癒やし」の融合
- 解決の核：「ONSEN・ガストロノミーツーリズム」の応用
  - 「地域の食・自然・景観・文化・歴史を『ウォーキング』で体感する仕組み」

ガストロノミーツーリズム
その土地の気候風土が生んだ
食材 ・ 習慣 ・ 伝統 ・ 歴史 ＝ 食を楽しみ、その土地の食文化に触れることを目的としたツーリズム
欧米を中心に世界各国で取り組まれている

- 別府棚田への応用
  - この仕組みを別府の棚田エリアに導入する。
  - 「温泉（扇状地）」を起点に、「棚田（山間部）」をめぐり、そこで育まれた「食」を味わう。
  - これが、分断された2つのエリアを「つなぐ」鍵となる。

活動の全体フロー（年間スケジュール）

インプット	6月	【インプット】	既存の「別府八湯ウォーク」体験
	7月	【企画】	グループワークによる企画提案
	7月	【トレーニング】	企画採用されたコースでガイド指導
アウトプット	7月	【実践】	別府市美術館企画展での学習 & 大学2年生に向けた「新コース」 ガイド実演
	8月～12月	【修正】	7月の実演をもとに、グループワークによる修正
発展	1月	【実践】	明豊高校3年に向けたガイド実演
	1月	【発展】	ガストロノミーツーリズム（農家×地獄蒸し）の実践

活動① 基礎調査と深掘り（6月～7月）

6月 既存の「別府八湯ウォーク」体験

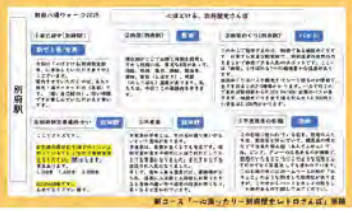
7月 別府市美術館「ゼンリン創業の地・別府と観光と地図の歴史展」見学

学び：表面的な観光地巡りではなく、地図や歴史的背景（ストーリー）を知ることの重要性を理解

活動② 新コース誕生

成果物：新コース「～心湯ったり～ 別府歴史レトロさんぽ」の完成

特徴：友永パン屋、駅前高等温泉、カトリック教会等、若者が「エモい」と感じるレトロなスポットを連結



活動③ 「ガイド実践演習」（7月/1月）

実施内容

- 3年生がガイド役、2年生や高校生が実際のお客様となる「ロールプレイング形式」

効果

- 3年生：伝える難しさと面白さを体感（プレゼン力向上）
- 2年生：先輩の姿を見て、次年度の目標設定（縦の継承）
- 高校生：明豊高校との高大連携事業により、学部学科への進学の可能性が高まり、さらなる継承へ

活動④ 食と農の融合「ガストロノミーツーリズム」（1月）

実施日：1月23日（東山・鉄輪エリア）

実施内容

- サツマイモ農家（Bee Factory等）の訪問
- 鉄輪「大黒屋」での地獄蒸し体験

ねらい

- 狙い：単に歩くだけでなく、その土地の食材（サツマイモ）をその土地の調理法（地獄蒸し）で食べる体験をコースに組み込む検証

※焼きイモと蒸しイモの味の比較する体験も可能

まとめと次年度の展望 ～ONSEN・ガストロノミーウォーキングへ～

次年度の構想

- 「生産の場（東山）」と「消費・体験の場（鉄輪）」をつなぐツーリズム

【STEP 1：東山・棚田エリア（里山の恵み）】

- 体験：東山棚田群での農村体験、竹細工体験
- 食材調達：「別府野菜」（サツマイモ、米）、ジビエ、ハチミツ等の収穫
- 魅力：雄大な風景と生産者との交流、食文化の源流を知る
- 移動、まちあるき：食材を持って鉄輪へ移動。湯けむりの景観を歩く

【STEP 2：鉄輪エリア（温泉と食の融合）】

- 地獄蒸し：温泉の蒸気で、自ら調達した食材を蒸して食す
- 目指す姿：食×文化×歴史×風景を五感で味わう、別府ならではの「ONSEN・ガストロノミーウォーキング」の確立

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

文化財保存・継承と教育旅行活用プロジェクト ～戦後80年に向けたピースツーリズム～

別府大学／国際経営学部　講師　小野　貴史

文化財保存・継承と観光活用プロジェクト

～戦後80年に向けたピースツーリズム～

別府大学 国際経営学部国際経営学科　講師：小野貴史
学生：平林那菜　小森優那　渡邊結愛　池田博貴　谷山須奈央　寺本弥真斗　豊田格己
羽田野秀剛　松田玲也　中山修也　パモド・マドゥランガ　姜　大豪

平成31年4月に施行された「改正文化財保護法」に規定された文化財の保存・活用に関する総合的な法定計画である文化財保存活用地域計画により、各自治体は既存の指定文化財だけはなく未指定文化財の調査など、幅広く文化財の積極的な保存と観光への活用が課題となっている。そのため、文化財の保存・活用に対する地域住民の関心や理解の促進、さらに地域のアイデンティティの再認識が期待されている。

1. 事業目的

事業目的：県内戦争遺跡の観光資源化とストーリー構築

今年度の特色：「戦後80年」への特化

焦点：「開戦」だけでなく「終戦」にフォーカス。
特に「降伏文書調印（重光葵・梅津美治郎）」と「最後の特攻（中津留達雄）」を深掘りする。

最後の特攻
昭和20（1945）年8月15日

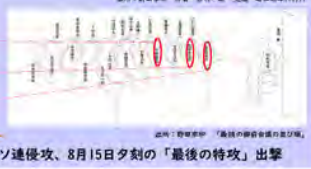
降伏文書調印
昭和20（1945）年9月2日

背景・大分県の特異性「最後の御前会議」

事実
・昭和20年8月14日、ポツダム宣言受諾を決めた「最後の御前会議」

キーマン
・参加メンバーのうち3名が大分県出身者

陸軍大臣・阿南惟幾
陸軍参謀本部総長・梅津美治郎
海軍軍令部総長・豊田副武



受諾判断の遅れが、広島・長崎への原爆投下、ソ連侵攻、8月15日夕刻の「最後の特攻」出撃

活動報告① 8月15日「最後の特攻」と慰霊（津久見・大分）

対象
・玉音放送後に出撃した中津留達雄大尉（津久見出身）

中津留達雄大尉之墓（津久見）

・活動：津久見市教委・山下俊雄氏による解説（中津留大尉の墓、図書館「戦後80年展」）。

・大分市「神風特別攻撃隊慰霊祭」への参列とメディア取材対応

調査深掘り「宇垣中将と山本五十六の短刀」（伊平屋島・沖縄）

平和の碑（糸満市）

事実
中津留大尉の機には宇垣纏中将が同乗

平和の碑（糸満市）中津留達雄 刻銘

モノの記憶
宇垣中将は、真珠湾攻撃（佐伯湾発進）を指揮した山本五十六の形見である「短刀」を所持し、沖縄県伊平屋島に突入した

真珠湾攻撃発進之地（佐伯）

ストーリー
佐伯から発進した太平洋戦争が、山本の短刀と共に沖縄で終わるという連鎖

中津留大尉らが突入した岩礁（伊平屋島）

活動報告② 9月・10月「降伏」と「平和への希求」（大分・杵築）

9月15日（大分）
・先哲史料館にて「降伏文書（原本）」閲覧
重光葵・梅津美治郎（共に大分出身）の署名を確認

降伏文書

堀悌吉

10月19日（杵築）
・先哲史料館・松原勝也氏の講演と重光家「無迹庵」訪問

先哲　重光葵と大分

重光家「無迹庵」

もう一人の視点
・堀悌吉（杵築出身）、山本五十六の親友でありながら平和的軍縮を訴えた理性の人
彼らの人間関係図を含めて考察

活動報告③ 足元の戦争遺産・別府「消えゆく記憶」

調査対象
・宇佐海軍航空隊や海軍将校などが利用した「料亭 なるみ」や「鶴乃屋」跡地など

料亭 なるみ跡地

旅館 鶴乃屋跡地

事実
・出撃前の若者が辞世の句を残した場所

課題
・近年の開発による取り壊し
「場所」の消滅による「記憶」の喪失への危機感

今年度の成果「ヒト・モノ・コト」のストーリー（つながり）

発見
太平洋戦争の始点と終点に、常に大分県出身者とゆかりの「モノ」が関わっていたことの再確認

「佐伯（開戦/山本）」
昭和16(1945)年12月8日

「御前会議（大分出身3名）」
昭和20(1945)年8月14日

「大分→沖縄・伊平屋（最後の特攻/宇垣・中津留・短刀）」
昭和20(1945)年8月15日

「ミズーリ（調印/重光・梅津）」
昭和20(1945)年9月2日

今後の課題と次年度（最終年度）に向けて

今後の課題
・壮大なストーリーと、消えゆく別府の遺産をどう残すか

計画
・シンポジウムの開催
・大分発のピースツーリズムストーリーを発信
・保存版リーフレット作成：複雑な人間関係図と、失われた遺構（料亭なるみ、鶴乃屋など）を記録として残すために資料作成

写真 → 作成 ← 証言

次世代へ継承するためのツール

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

大学生によるフィールドワークを通じた放置竹林対策と竹資源の利活用提案事業

別府大学 国際経営学部　国際経営学科
食物栄養科学部　発酵食品学科

地域が抱える課題

放置竹林の拡大と防災・環境リスク

大分県は全国有数の竹林面積を誇るが、管理放棄による里山の荒廃が深刻化している。

- **管理主体の不在と拡大**：林業従事者の高齢化・減少や竹材の収益性低下により、管理されない竹林が隣接する森林や農地へ侵入。
- **【防災リスク】浅根性による地盤崩壊化**：竹は「浅根性」であり、根が地表付近で密集して地割れを誘発。斜面の安定性を低下させ、土砂災害のリスクを増大させている。
- **環境・安全性の悪化**：密生による景観悪化、倒竹・枯竹による通行障害など、地域住民の安全な生活環境を脅かしている。

目的

現場理解と資源循環モデルの構築

「厄介もの」としての竹を「価値ある資源」へと転換するため、2つのアプローチで実施した。

1. **フィールドワークを通じた課題の「自分事化」**：講義での理論学習に加え、現場体験を通じて放置竹林がもたらす防災・経済的課題を体感的に分析・認識。
2. **未利用資源「竹の葉」の科学的再評価**：通年で確保可能な「孟宗竹（モウソウチク）」の葉に着目。既存の竹の葉茶を科学的に分析し、機能性・嗜好性の面から高付加価値な資源循環モデルを提案。

事業内容

＜活動体制＞

【活動地域】杵築市山香町
【参加学生】別府大学 国際経営学部 国際経営学科 3年（60名）、別府大学 食物栄養科学部 発酵食品学科　4年（8名）
【参加教員】国際経営学科・阿部博光、発酵食品学科・陶山明子
【連携団体】「山のカケラ」 東海林　拓実 氏（代表）

＜フィールドワークの様子＞

実地体験と学生の視点

杵築市山香町の現場で、竹林管理の過酷さと再生可能資源としての可能性を学んだ。

【体験活動】

放置竹林内の観察1：強風下での竹の倒伏状況を確認し、密生した竹は相互に支え合う一方、孤立した竹は倒木リスクが高いことを実感。
➡ 竹林管理には伐採だけでなく、適切な間隔の維持が重要であると認識。

放置竹林内の観察2：竹の根による「地割れ」を直接確認
➡ 土砂災害への懸念を実感。

重量体験：水分の多い青竹は極めて重く、1本を運び出すのに学生4人がかりの重労働となる現実を体感（乾燥した竹との重量差を学習）。

加工体験：小型チェーンソーによる切断加工を行い、技術習得の必要性を理解。

【学生の気づき】

- 収穫した竹を持って斜面を下る大変さを経験したが、見た目ではわからない危険さを身をもって経験できた
- 竹林の問題は思ったより深刻であり、人の手には負えないレベルになってしまっていることがわかった
- 問題解決のためには実際に手伝いに行かなければならない
- 竹のあれこれについて（SNSなどを用いて）広める必要がある

【東海林氏による竹の活用方法の紹介】

特に孟宗竹は常緑樹で一年中葉がついており、竹材だけでなく葉も年間通じて利用可能な資源である。
竹は成長が早く、再生可能な資源として注目されている一方で、市場価値や加工技術、搬出コストなど課題も多い。

【学生による利活用提案】

カテゴリ	提案内容
新製品開発	竹製食器、竹炭、バイオマス燃料、楽器、プラスチック代替素材
体験型観光	サバイバルゲーム会場、ヨガ・瞑想パーク、竹灯籠イベント、キャンプ場開発

＜竹の葉茶の科学的検証＞

機能性と嗜好性の分析

大学で、竹の葉茶の市場性を探るための科学的データ収集を行った。

【香気成分分析】（GC-MSによる乾燥方法の比較）

天日干しと通常加熱（機械）による香りの違いを定量分析。
天日干しに特徴的な香気成分：天日干しを1とした場合、通常加熱の比率は以下の通り。

- 6-メチル-5-ヘプテン-2-オン（柑橘・レモングラス様の香り）：0.2
- 1-ヘキサノール（青葉・芝生様の香り）：0.3

➡ 天日干し製法は、爽やかでフルーティな香気成分をより多く保持。
全体の香気成分総量は通常加熱製法の方が高い。

【抗酸化活性】

抗酸化活性が認められたが、市販の緑茶の9%程度であった。

【官能評価と市場への課題】

パネラー12名による5段階評価（緑茶を3とする相対評価）を実施。
利点：見た目（水色）は緑茶を上回る最高評価を獲得。
味も「まろやか」「渋味・苦味が弱い」と好意的な意見。
課題：パネラーから「古い畳のような香り」との指摘があり、飲みにくさの要因となっている。
➡「畳のような香り」を抑制する加工法の確立が必要
改善案：焙煎条件を検討・柑橘類とブレンド ➡ 香り改善

まとめ

本事業は、放置竹林の現状把握と竹資源の活用可能性の検討を通じて、地域内における竹林の適正管理への意識醸成を促し、持続可能な環境保全および防災意識の向上に寄与した。あわせて、竹の葉という未利用資源に着目した実験・分析により、新たな付加価値創出に向けた基礎的知見を得ることができ、今後の地域資源活用の展開に資する成果となった。さらに、学生はフィールドワークから実験・考察までを一貫して経験することで、地域課題を自分ごととして捉え、多角的に考察する力を養った。これらの経験は、地域と継続的に関わる関係人口の育成につながるとともに、外部視点からの分析や提案が地域資源の再評価や新たな気づきを促す契機となると期待される。

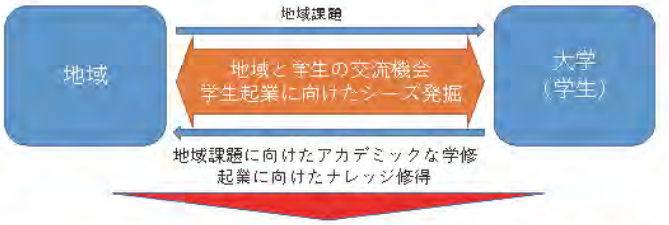
事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

亀川商店街再活性化計画策定事業（V）

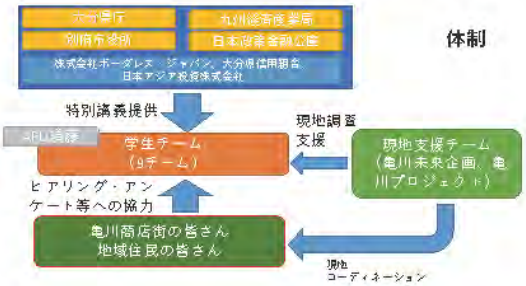
立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部　教授　須藤智徳

0. 背景

亀川商店街は別府市の北部にある商店街で、ＪＲ亀川駅から徒歩５分に位置する南北約９００ｍの商店街である。近年は来街者も減少し、経営者の高齢化・後継者難や空き店舗の増加等問題を抱えている。2018年にはその中核店舗であったマルショク亀川店が閉店したが、2020年に試験的に空きビルを活用して、APUの学生が期間限定のカフェを開業したところ、近隣住民から高い評価を受け、その後APU学生による「無料のスーパーマーケット」の期間限定実施した際にも多くの来店客が訪れる等、商店街活性化のポテンシャルは十分にあることが確認できている。他方で、住民の高齢化に配慮し、イベント等による騒音の発生等に留意し、すべての住民にとって受け入れ可能で持続的な取り組みを行なっていく必要がある。



大分県等と連携し、実践型の起業家を目指す学生に対し、課題発見、課題解決および提案力を構築するとともに、起業に必要な手続きや資金調達、企業経営等の実践的な知見の修得を目指す。

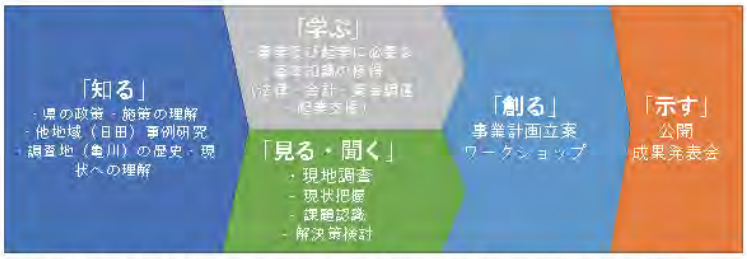


1．本事業の目的

本事業は、これまでの当該授業での経験と学生たちによる亀川商店街での試験的なビジネス実施実績を踏まえ、亀川商店街の課題を特定し、同商店街の特性を活かしたビジネスによる商店街活性化方策を検討し、もって亀川商店街の活性化を図ることを目的とする。

2．実施内容

本事業は、秋セメスター開講科目「環境・開発　特殊講義/専門実習」として実施し、14回の授業のうち、8回は教室での講義（うち6回はゲストスピーカーによる講義）、1回は教室でのワークショップ、2回を現地フィールド調査、１回をパイロット事業実施、1回を公開発表会開催とした。



本事業は、①「知る」地域の把握、②「学ぶ」基礎知識の修得、③「見る・聞く」現地フィールド調査、④「創る」事業形成、⑤「示す」公開成果発表、の５部で構成。

1　10月3日イントロダクション
2　10月10日経済産業省特別講義
3　10月17日大分県の創業支援政策（大分県庁）、別府市の地域課題と政策（別府市役所）
4　10月24日亀川商店街の課題と取組（堀文、亀川未来企画）
5　11月1日現地調査（現地状況の把握）
6　11月7日起業とは。起業に必要な法律・会計の基礎知識
7　11月14日ボーダレスジャパン特別講義
　11月21日QB
8　11月29日現地調査（社会課題の特定）
9　12月5日事業計画立案手法（ワークショップ1）
10　12月12日資金調達手法
11　12月19日公的金融機関による起業支援（日本公庫）
　12月26日Christmas Break
　1月2日New Year Break
12　1月9日金融機関の役割（大分銀行）
13　1月17日計画事業パイロット実践
14　1月24日最終プレゼン

ゲスト講師による講義

フィールド調査

パイロット事業実施

公開発表会

立案した事業の実施と協働化の方向性

本事業を通じ、学生が亀川の歴史や地理、文化を知るきかっけとなるとともに、亀川地区が抱える社会課題に対し、単なる一過性のイベントではなく、持続可能なビジネスの実施を前提とした事業提案を検討、実際にパイロット事業として実施したうえでブラッシュアップを行なうことで、事業立案及び実施への実践的な学びとなっている。

本事業で策定した事業案は成果報告会にて亀川商店街関係者、地域住民等とも共有され、学生が引き続き具体的な事業化を進める場合にも公的サポートや地域住民からの支援を得られやすい環境となっている。

更に、学生が自らが事業を実施することを選択しなかったとしても、提案あった事業は亀川商店街関係者及び地域住民に引き継がれるとともに、来年度希望する学生がいれば、その学生らと連携して地域住民が自ら事業実施を図ることが可能となる。

一過性のイベントではない事業形成を行なう本事業に対する亀川商店街関係者及び地域住民の評価は高く、本事業の継続が強く望まれている。

3．まとめ

本事業を通じ、受講学生たちの研究成果を地域住民と共有する機会となり、学生による新たなアイデアを生かした地域振興を図る活動を始めていくきっかけとなった。また、受講学生たちは、今回のフィールドスタディで地域の魅力を感じ始めており、今回、本事業を通じた協働を行なったことで地域住民とのつながりを深めることができた。今後、地域の魅力をより具体化するとともに、地域住民とともに地域活性化に更なる貢献を果たすことが期待される。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

大分県産原木乾しいたけの美味しさを子どもにつなぐ食育プロジェクト
別府大学短期大学部　食物栄養科

（参加学生）岩野瑚雪、衛藤晃輝、織部友菜、楠本明日珂、後藤綾乃、後藤真心、貞岡愛依菜、左藤涼子、實﨑琳花、新井莉月、野田奈桜子、廣田夏帆、湯浅百花

（担当教員）海陸留美　（助手）甲斐明日香、佐藤未侑

【地域課題】
乾しいたけの国内生産量、大分県生産量ともに約40年間減り続けており、乾しいたけ離れが加速している。
その原因として、生産者不足、中国産などの輸入量の増加、国産・県産乾しいたけの価格高騰、調理の手間などがあげられている。

【事業の目的】 将来栄養士として食の大切さや食文化継承に携わる学生たちが主体となり、
1. 大分県産原木乾しいたけの栄養・うま味・文化的価値などの付加価値を再認識する。
2. 大分県の未来を担う小学生やその保護者に伝えるための食育プロジェクトを企画・運営し、未来の食文化継承と地元産業の活性化を図ること。

地域課題認識①～原木乾しいたけの入札・販売・流通～
大分県椎茸農業協同組合　参与　有馬　忍　先生

- 大分県で生産されたしいたけがOSKに集められ、定期的な市場が開催され、入札による販売が行われていた。
- OSKの集荷量は全国一の膨大な量と品種であることに驚いた。
- 最新のAI選別機を用いた品質管理の高い技術や温度管理により、長年全国乾椎茸品評会で連続優勝する高品質の乾しいたけを維持できていることがわかった。

地域課題認識②～原木乾しいたけの栽培と生産～
国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会　会長　林　浩昭　先生

- 大分県は豊富な「クヌギ林」を活用した原木しいたけ栽培であること、そのクヌギ林の管理が重要であることを学んだ。
- クヌギ林は伐採後も新しいを芽を出し循環利用できるため、しいたけ栽培により環境保全にもつながり、「世界農業遺産」にも認定されていることを学習できた。
- 現地視察で伐採したクヌギの大きさを見たり、ほだ場の原木を抱えて重さを実感したりする体験を通して、生産者の重労働が実感できた。

地域課題認識③～原木乾しいたけの研究～
大分県農林水産研究指導センターきのこグループ長　上野　美奈子　先生

- 大分県の乾しいたけを差別化するために、新たなブランドである「うまみだけ」８品種の「品種ごと」に商品をつくり、品種特性を前に出す取り組みや、大分県の気候に合ったオリジナル品種を開発した初の取り組みに感銘を受けた。
- 乾しいたけの機能性成分に関する研究では、乾しいたけの紫外線照射によるビタミンD含有量が増加する内容が興味深く、子どもの成長に重要な栄養情報であるので、食育に活用したい。

ワーキング会議

1．小学生向け「食育デジタルツール」の作成
　SNS（インスタグラム）を活用
　(1)かわいいイメージキャラクターの考案
　(2)これまでの地域課題学習で学んだことを配信
　(3)月ごとの乾しいたけの「栄養コラム」を配信
2．乾しいたけが苦手な子どもが食べやすくなるような戻し方、調理法の研究
3．乾しいたけの健康面に関する研究

学生が作成したイメージキャラクター → AI動画生成サービスアプリから動画を生成

インスタグラムを活用した小学生向け「食育デジタルツール」の作成＜12月の配信＞

【この事業を通して学んだこと】

- 大分県の特産品である原木乾しいたけについて多くの事を学び、自分たちが栄養士として何ができるのかを考えることができた。
- 「しいたけの良さ」を、未来ある子ども達にどのように伝えるのかその手法を考案していきたい。同時に「伝え続けることの重要性」についても認識できた。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.41 未利用果実を活用したふるさと納税返礼品の開発

別府溝部学園短期大学／食物栄養学科　教授　牧　昌生

未利用果実を利用したふるさと納税返礼品の開発

別府溝部学園短期大学　食物栄養学科　教授　牧昌生
助手　児玉真由美　学生　石丸真瞳　　江島花奈　他

課題

①別府公園の豊後梅は有効利用されていない

②オリーブ果実残渣は、産業廃棄物として処分されている

課題解決方法

① 別府公園 豊後梅 → 除核処理 → 有効利用

② オリーブ果実残渣 → エキス化 → 商品の開発

①豊後梅解決方法

豊後梅果実の除核処理

➡ 食品加工することで価値向上

近年、食品ロス削減や地域資源の有効活用が重要な課題として注目されている。特に農産物加工の過程で発生する副産物は、十分な栄養価や機能性成分を含むにもかかわらず、未利用のまま廃棄される場合が多い。これらを食品素材として再利用することは、環境負荷の軽減だけでなく、地域の新たな産業創出や付加価値向上にもつながる。別府公園では豊後梅が植栽されているが、観賞用としての役割が中心で食品としての利用は限定的であり、有効利用されていない。また、国東市ではオリーブ栽培とオリーブオイル製造が行われているが、その過程で生じる搾油残渣は産業廃棄物として費用をかけて処分している。

豊後梅果実を利用した食品加工試作

連携企業と検討会・試作

商品化に向けて・・・

店舗メニューに追加決定

梅果実を利用した加工食品として、焼き菓子や総菜の試作を行った。また、連携企業と共同し、梅わらびもちの商品開発を行った。わらびもちの調製では、わらび粉と水、梅果実を加えた原料を加熱しながら十分に練り上げる工程が重要であり、特に練り時間を適切に確保することが品質を左右する。加熱と攪拌を十分に行わなければ均一な粘性や透明感が得られず、食感や外観に大きく影響することから、この工程を厳守することが最も重要である。ほのかな酸味のある滑らかな梅わらびもちが完成した。近日中に和風ちゃんぽん　うた乃店舗メニューに追加決定。

課題解決方法

① 別府公園 豊後梅 → 除核処理 → 有効利用

② オリーブ果実残渣 → エキス化 → 商品の開発

①オリーブ果実残渣解決方法

オリーブ果実残渣をエキス化

低コストで生産可能

➡ 食品に添加することで価値向上

オリーブ果実残渣エキスを利用した商品開発

オリーブ果実残渣とは、オリーブ果実から搾油を行った後に生じる固形副産物であり、ポリフェノールや食物繊維を含む未利用食品資源である。成分分析調査を行ったところ、ポリフェノールは100gグラム当たり500mg含まれており、オレイン酸に関しては市販のオリーブオイルと同等であることが分かっている。オリーブ果実残渣に含まれるオレイン酸、ポリフェノールや食物繊維などの機能性成分に着目し、エキス化によって食品へ応用可能な素材に転換し、価値の向上を目指した。オリーブ果実残渣エキスを用いて、焼き菓子への応用として、クッキーおよびカップケーキを試作し、風味や色調、食感の変化を観察した。エキスそのものはオリーブの香りが残っていたが、加工品にした後は香、味はほんの少し感じる状態で、ほんのり色がつく程度であった。そのため、さまざまな商品に加工することができた。

連携企業と共同開発

別府の温泉水とオリーブ果実残渣エキスを使用した生パスタの試作を行った。強力粉と中力粉の配分や水分量など検討を行なった。別府ならではの温泉水を使用することで、おんせん県大分をアピールできる麺が開発できた。

オリーブ農園にてオリーブ果実採取と選果

2025年10月23日　国東市オリーブ果実農園　河野農園

オリーブ果実採取　選果前のオリーブ果実　オリーブ果実選果

2025年10月に国東市の河野農園にてオリーブ果実の採取を実施した。採取後、成熟度、色調、形状、外傷および腐敗の有無を確認しながら選果を行った。オリーブオイル搾油機にて破砕を行った後、遠心分離法により搾油を行った。オリーブ果実重量の約1割のオリーブオイルを搾油することができた。搾油工程後にオリーブ果実重量の約9割の残渣が発生した。この残渣を加工しエキス化した。

オリーブオイル搾油作業と搾油残渣

連携企業と覚書締結

商品の完成

結　果

①豊後梅は、
「豊後梅入りわらびもち」の商品化

②オリーブ果実残渣は、
別府温泉水・オリーブ果実残渣エキス入り
「コラボパスタ」の商品化

別府市ふるさと納税返礼品に登録予定

まとめ：この事業は、官能評価を通して嗜好性と商品性を同時に評価できた点に大きな意義がある。別府公園の豊後梅は鑑賞後、商品加工し有効利用することで、大分県木としての魅力発信に大いに役立つ。「豊後梅入りわらびもち」の商品を店舗販売することで、未利用果実となっていたものに価値が生まれ、有効利用する道が開けた。 オリーブ果実残渣は、先行研究では、残渣を粉末化することで有効活用をめざしたが、粉末加工費用と産業廃棄処理に大きな差が生じるため現実的ではないという判断をした。今年度はオリーブ果実残渣をエキス化することで、加工費用も抑えられ、様々な商品に利用することが容易にでき、今回は別府温泉水で作製したパスタ麺にエキスを添加した。連携企業である和風ちゃんぽん　うた乃と共同し、ボロネーゼパスタと和風バター醤油パスタの「コラボパスタ」を商品化することができた。別府市のふるさと納税返礼品として早い段階で登録を目指す。地域特産品や独自性のある返礼品を通じて自治体の魅力を発信する役割を担う一翼となると自負する。より多くの方々におんせん県大分、別府の魅力を発信することができたと考える。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.42 世代間を結ぶ　若い世代が朝食をしっかり　時短レシピ提案活動

別府溝部学園短期大学／食物栄養学科　教授　望月　美左子

若い世代にしっかり食事を！
～時短レシピ提案活動～

便利な加工食品活用
- 缶詰
- 冷凍食品
- チルド
- カット野菜
- 乾燥品

背景　20歳代朝食欠食増加 → 幼児・小学生食事状況調査 → 安価 時短 おいしい しっかり栄養 ？

食事問題点

	問題点	解決策
1	幼児期の食事準備と食事時間がかかる	時短でできるレシピを検討
2	小学生朝食欠食増加	ご飯・味噌汁の見直し提案 味噌汁の具材を知る

幼児を持つ保護者へ朝食喫食調査結果
朝食は喫食すべきという意識はある。
「食欲がない」「時間がない」などの理由が、
喫食のハードルを上げている。
食に対する関心up→子どもが好きなレシピ、
食べやすいおにぎりレシピを考案へ！

解決に向けた実施事項

しっかり食事ができる時短レシピ考案、その提案活動

	解決に向けた実施事項	実施時期
1	若者の食事摂取状況調査	5月
2	別府市食生活推進員と意見交換	5月
3	幼児を持つ保護者に喫食状況調査	6月～7月
4	レシピ試作考案	7月
5	公開講座で時短レシピ提案活動	9月
6	大分県農林水産祭で嗜好調査	10月

別府ヘルスメイトさんと意見交換
若者の朝食欠食、食育活動の若い世代参加状況
毎日の食事準備のアドバイスを受ける

おにぎりアラカルト

ミートソース使い切りアレンジ

時短シピ提案活動

親子・孫と一緒に
しっかり時短レシピ公開講座様子

公開講座「食品ロス削減　簡単しっかり朝食」
ミートソース、ガパオライス、ラビオリ、小お結びアラカルト
親子・孫１０人に調理実習で提案レシピを披露し、一緒に調理することで、より理解を深めてもらうことができた。
大変好評で、**またやりたい**との声を聞くことができた。

大分県農林水産祭で試食聞き取り調査より
- 試食した焼きラビオリはおいしかったと大好評
- ミートソースというと、スパゲッティとの答えが大多数

大分農林水産祭嗜好調査

ラビオリ

しっかり食事時短レシピ集

考察及び今後の課題

若い世代とくに幼児のいる若者が、しっかり食事ができるように、その課題を再検討し、それぞれの課題解決につながるレシピを提案することができた。提案したものは好評であり、実際に一緒に調理したり、食べてもらうことにより、より理解が深まることが実感できた。今後、栄養士としてしっかり食事を提供してゆきたい。

協力：別府市食生活改善推進協議会
別府市 いきいき健幸部 健康推進課
学校法人溝部学園幼保連携型認定こども園ひめやま幼稚園
社会福祉法人野津福祉会幼保連携型認定こども園野津こども園
別府溝部学園高等学校・別府溝部学園短期大学

別府溝部学園短期大学
食物栄養学科２年　嶋﨑愛花、長野真侑
指導教員　教授　望月美左子

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

2025年度　地域の課題解決事業成果報告会

オンデマンドでの開催

視聴はこちらから！

2025年度に「おおいた地域連携プラットフォーム」を通じて取り組んだ、「大分県と県内高等教育機関との連携による地域課題解決事業」（3件）、「県内市町村と県内高等教育機関との連携による地域課題解決事業」（3件）、「県内企業等と高等教育機関の連携による地域課題解決事業」（8件）「フィールドワーク支援事業」（22件）について、WEBにてオンデマンド公開しています。配信開始後から多くの方にご視聴いただいております。

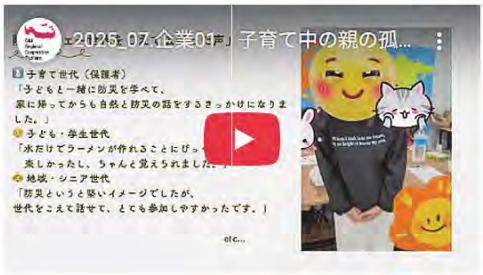
報告会で発表した皆さん、視聴いただいた皆さん、ご協力ありがとうございました。

（報告動画の一例）

事業番号 1

事業番号 5

事業番号 13



事業番号 21

フィールドワーク支援事業の審査について

「フィールドワーク支援事業」22事業の発表について、おおいた地域連携プラットフォーム「フィールドワーク支援事業ワーキンググループ」構成員及び各市町村職員により、「学生の取り組み内容」「プレゼンテーション力」「地域の課題解決に向けた成果」の3つの観点から審査が行われました。審査の結果、以下の事業が上位入賞を果たしました。

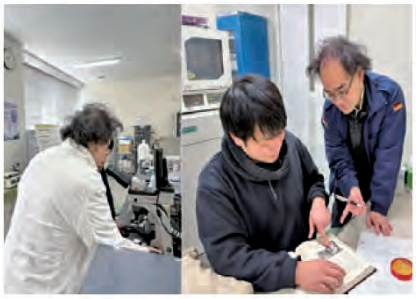
（地域枠）

順位	事　業　名	担　当　教　員	掲載頁
1	回天映像制作＆シンポジウムプロジェクト	日本文理大学 工学部 教授　小島　康史	25
2	大分県下の飲食・宿泊事業者に向けた食物アレルギー対応推進事業	別府大学 食物栄養科学部 教授　高松　伸枝	27

（自由枠）

順位	事　業　名	担　当　教　員	掲載頁
1	世代間を結ぶ　若い世代が朝食をしっかり 時短レシピ提案活動	別府溝部学園短期大学 食物栄養学科 教授　望月　美左子	43
2	つながる健康・ひろがる共生 ―すこやかな多文化共生の地域づくり事業	大分県立看護科学大学 看護学部 学内講師　篠原　　彩	35

フィールドワーク支援事業のひとこま



フィールドワーク支援事業

集計

「セメントで攻めんと！－チル（Chill）な津久見の新たな観光フェーズ－」

- 津久見のオリジナルTシャツをみんなで着て、アピールできた。
- セメントという新たなジャンルを開発した。
- 津久見という場所を多くの人に知ってもらった。

みんなでつくる避難所での健康維持に関する"かるた"の作成と評価

- 災害支援における理学療法士の働きについて、環境づくりや連携体制など知らなかったことを実際に現場で活躍している方から聞けたことで災害支援に対する想像力と興味が高まった。
- 今まで知らなかったことをすることができ、災害時の支援者のあるべき姿、被災者の状態をリアルに知ることができ、とても良い勉強になった。

少子高齢化が進む地域における地域資源アーカイブ作成による再発見と未来への活用 ～国東地区におけるアーカイブ資料作成活動による地域資源への理解の深化～

- 地域貢献を通して自分自身の成長に繋がったと感じる。
- まだ知らなかった国東の魅力と課題を発見できた。

回天映像制作&シンポジウムプロジェクト

- 回天の歴史を記録映画として残し、地域の史跡と証言を通じて平和の大切さを次世代に伝えることで貢献できた。
- 回天についてまだ知らない地域の子供たちや地域の外の人たちへ知ってもらう機会になった。

大分三大竹祭りからはじめるDX化

- 今回、地域に様々な課題が存在していることや、学生にも解決できそうな問題もあることを知り、解決に向けた行動を続けていきたいと思った。
- 観光客やイベントに参加する人が減っている中で、高齢者の方や他県からいらっしゃった方に体すべてでその場所を感じてもらえるように活動できた。

大分県下の飲食・宿泊事業者に向けた食物アレルギー対応推進事業

- 新製品を作成することで地域貢献できた。
- 地域の課題について、菓子店の方や色々な方と話し合いを通して交流でき、気づきがあった。

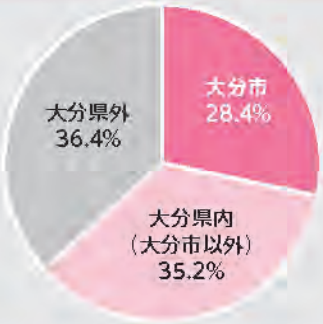
重光家住宅主屋の廃業味噌蔵からの蔵つき微生物の探索とその有効利用

- 味噌蔵の微生物を探索することで、商品開発への応用や、地域発展の手がかりに繋がると思う。
- 実際に味噌を復活させたいと思う。

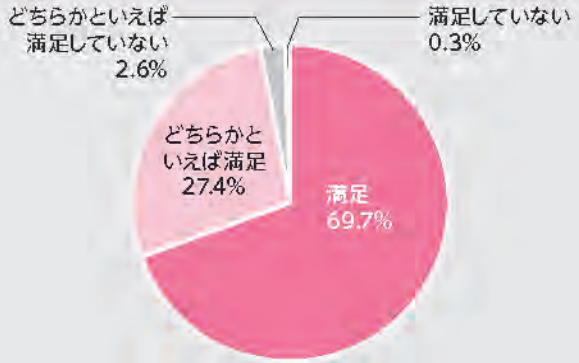
規格外トマトの有効利用－トマト酢の商品開発

- 大分県は、気候が比較的温暖な為夏にトマトがたくさん出来る。余りすぎて廃棄になる例も少なくないと思う。なので、トマト酢のように形を変えることはとても効果的だと思う。
- 地元の農家さんにとって安定的な収入が得られることは安心できることだと思う。また、安定的な収入が得られることでトマトの栽培も続けられると思った。

Q. 出身地はどこですか？



Q. 事業に参加しての満足度は？



インバウンドビジネスへの対応に向けた「昭和の町」国際化プロジェクト

- 若者から見た視点から、今まで地域が気づかなかった問題点や課題点を発見することができた。
- まず、自分がその地域のことを知れたこと、認知できたことが貢献の1つになったと思う。

府内藩の名産品再興を通じた国東七島藺の持続可能な活用と伝統産業の活性化

- 地域の方々と話せるきっかけになった。
- 現地に行って学べたのが楽しかった。
- 普通の授業ではできない体験ができた。

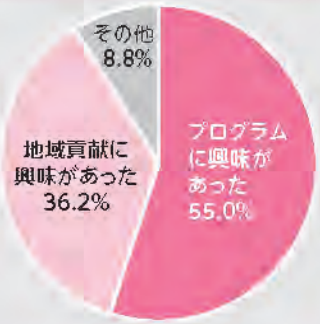
多文化共生防災ワークショップ：外国人住民とともに学び合う、災害時の健康と生活への備え

- 外国人留学生と共に防災について考えることで、国籍に関係なく同じ地域に暮らす住民として災害に向き合う意識が育まれ、地域内の関係性づくりにつながった。
- 災害時の備えについて考え、「全員で備える」必要性を共有したことで、防災を地域全体の課題として捉える意識が高まった。

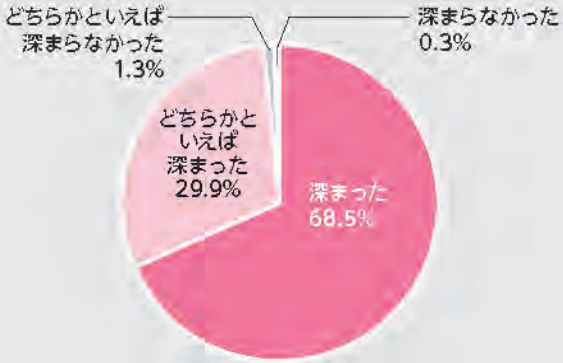
参加学生等アンケート

結　果

Q. どのような目的（動機）で参加しましたか？



Q. 地域への理解は深まりましたか？



地域DXに向けた昼夜マッピングパーティによる地域課題の可視化レポートの作成

- 実際に地域の方とともに街を歩いて、様々な気づきを得ることができた。
- 今回のイベントを通して、イベントの運営や、事前調査など、普段経験できないことに挑戦することができた。また準備の大変さや、細かいところまで考える必要があることを実感し、イベントを成り立たせる難しさを知ることができた。

地域連携によるSTEAM教育ワークショップの指導者育成

- プロジェクで学んだスキルが身につき実践の場面で活かすことができた。
- 予想以上に子どもたちとふれあう機会が多くあった。

つながる健康・ひろがる共生―すこやかな多文化共生の地域づくり事業

- 外国人労働者との交流や健康状態を確認することで、文化の違いを実感し、健康に関する情報を伝えることができた。
- 外国人労働者と地域住民と協力してイベントを行うことで、国籍が異なっても地域を盛り上げることができると感じた。

学生と描く臼杵の物語―観光映像を通じた地域共創プロジェクト

- 動画作成を通して臼杵の魅力を少しでも多くの人に知ってもらうことができたと感じた。
- 臼杵市の隠れていた魅力を引き出し、地域の観光客増加に少しは貢献できたのではないかと思う。

ガストロノミーツーリズムによる地域活性化とまちあるきガイド人材育成事業

- 普段何も考えずに訪れる場所や住んでいる地域などをより深く知ることができた。またその場所の歴史などについても知れ、それを地域の人や学生へ発信でき、一緒に地域のことについて楽しく深く学べたのではないかと感じた。

文化財保存・継承と教育旅行活用プロジェクト ～戦後80年に向けたピースツーリズム～

- 自各地にある戦争の痕跡を知ることができると感じた。
- ピースツーリズムの勉強を通して抱えている問題や過去の出来事を知る事が出来て私自身が将来に向けて考える様な学びが出来た。

大学生によるフィールドワークを通じた放置竹林対策と竹資源の利活用提案事業

- どの地域にも、用途なく廃棄されている資源があると思うので、整備によって竹の葉が捨てられているということの周知も兼ねて、続けていくべき事業だと感じた。
- 竹茶を地域の特産品にすることができれば、違う視点で地域をアピールできると思う。

亀川商店街再活性化計画策定事業（V）

- 実際に地域の方々が授業をしてくださったおかげで、地域の方から見える課題を知ることができ、地域の活性化を導く授業だったと感じた。
- ツアーを実施して住民との距離を縮めることができた。

大分県産原木乾しいたけの美味しさを子どもにつなぐ食育プロジェクト

- 椎茸の魅力だけでなく作り方や育ち方について知ることができた。
- 何気なく食べていたしいたけの栽培方法だけでなく栄養成分や今の乾しいたけの課題について考え、知ることができた。

未利用果実を活用したふるさと納税返礼品の開発

- 地域で生産されているものを使用し、調理加工をすることで、それを広めることができた。
- 大分の食材や料理を味わってもらうことができた。
- 地域の方に積極的に関わることができた。

世代間を結ぶ 若い世代が朝食をしっかり 時短レシピ提案活動

- 地域の人に地元の食材を活用したメニューなどを広めることができた。
- 地域の方に試食してもらい、家でやってみようという声をいただいた。

県内大学・短期大学等一覧

令和８年１月現在

学校名	学部・大学院の別	学部・学科・コース等			令和８年度 入学定員(※)
大分大学	学　部	教育学部	初等中等教育コース		140名
			特別支援教育コース		10名
		経済学部	総合経済学科		270名
		医学部	医学科		100名
			看護学科		60名
			先進医療科学科	生命健康科学コース	20名
				臨床医工学コース	15名
		理工学部	理工学科	数理科学プログラム 知能情報システムプログラム DX人材育成基盤プログラム 物理学連携プログラム 電気エネルギー・電子工学プログラム 機械工学プログラム 知能機械システムプログラム 生命・物質化学プログラム 地域環境科学プログラム 建築学プログラム	395名
		福祉健康科学部	福祉健康科学科	理学療法コース	30名
				社会福祉実践コース	35名
				心理学コース	35名
		学部計			1,110名
	大学院	教育学研究科	教職開発専攻	専門職学位課程	20名
		経済学研究科	経済社会政策専攻	博士前期課程	8名
			地域経営政策専攻	博士前期課程	12名
			地域経営専攻	博士後期課程	3名
		医学系研究科	看護学専攻	修士課程	10名
			医学専攻	博士課程	30名
		理工学研究科	理工学専攻	博士前期課程	143名
				博士後期課程	6名
		福祉健康科学研究科	福祉健康科学専攻	修士課程	20名
		大学院計			252名
		大学計			1,362名
大分県立 看護科学大学	学　部	看護学部	看護学科		80名
		学部計			80名
	大学院	看護学研究科	看護学専攻	博士課程（前期）	37名
				博士課程（後期）	4名
		大学院計			41名
		大学計			121名
日本文理大学	学　部	工学部	建築学科	建築設計コース 建築工学コース 住居・インテリアデザインコース 環境・地域創生コース	60名
			情報メディア学科	情報工学コース メディアデザインコース 情報コミュニケーションコース	80名
			機械電気工学科	未来創造工学コース 電気・制御システム融合コース 先端ものづくり設計コース	50名
			航空宇宙工学科	航空技術・総合工学コース エアライン整備・オペレーションコースス ベーステクノロジーコース	30名
		経営経済学部	経営経済学科	ビジネスソリューションコース 地域マネジメントコース 会計ファイナンスコース スポーツビジネスコース こども・福祉マネジメントコース	260名
		保健医療学部	保健医療学科	診療放射線学コース	80名
				臨床検査学コース	50名
				臨床医工学コース	30名
		社会デザイン学環			100名
		学部計			740名
	大学院	工学研究科	航空電子機械工学専攻	修士課程	8名
			環境情報学専攻	修士課程	8名
		大学院計			16名
		大学計			756名

学校名	学部・大学院の別	学部・学科・コース等			令和8年度入学定員(※)
別府大学	学　部	文学部	国際言語・文化学科		80名
			史学・文化財学科		100名
			人間関係学科		70名
		国際経営学部	国際経営学科		100名
		食物栄養科学部	食物栄養学科		60名
			発酵食品学科		40名
		看護学部	看護学科		80名
		学部計			530名
	大学院	文学研究科	日本語・日本文学専攻	博士前期課程	10名
				博士後期課程	3名
			史学・文化財学専攻	博士前期課程	10名
				博士後期課程	3名
			臨床心理学専攻	修士課程	10名
		食物栄養科学研究科	食物栄養学専攻	修士課程	10名
		大学院計			46名
		大学計			576名
立命館アジア太平洋大学	学　部	アジア太平洋学部（APS）			510名
		国際経営学部（APM）			610名
		サステイナビリティ観光学部(ST)			350名
		学部計			1,470名
	大学院	アジア太平洋研究科（GSA）	アジア太平洋学専攻	博士前期課程	15名
				博士後期課程	10名
			国際協力政策専攻	博士前期課程	45名
		経営管理研究科（GSM）	経営管理専攻	修士課程	40名
		大学院計			110名
		大学計			1,580名
大分県立芸術文化短期大学		美術科			75名
		音楽科			65名
		国際総合学科			100名
		情報コミュニケーション学科			100名
		専攻科（造形専攻）			24名
		専攻科（音楽専攻）			25名
		大学計			389名
大分短期大学		園芸科			30名
		大学計			30名
東九州短期大学		幼児教育学科			40名
		大学計			40名
別府溝部学園短期大学		介護福祉学科			35名
		食物栄養学科			40名
		ライフデザイン総合学科			75名
		幼児教育学科			50名
		大学計			200名
別府大学短期大学部		食物栄養科			40名
		初等教育科			180名
		専攻科（初等教育専攻）			20名
		大学計			240名
大分工業高等専門学校		機械工学科			40名
		電気電子工学科			40名
		情報工学科			40名
		都市・環境工学科			40名
		専攻科（機械・環境システム工学専攻）			8名
		専攻科（電気電子情報工学専攻）			8名
		大学計			176名
大分県立工科短期大学校		機械システム系			30名
		電気・電子システム系			30名
		建築システム系			20名
		大学計			80名
放送大学大分学習センター	学　部	教養学部	教養学科		—
	大学院	文化科学研究科			—
		大学計			—
学部計					5,085名
大学院計					465名
合　計					5,550名

※編入学を除く

■お問い合わせは

おおいた地域連携プラットフォーム

協働事務局事務担当：大分大学地域連携プラットフォーム推進機構
https://oita-platform.org
〒870-1192 大分県大分市大字旦野原700番地
TEL 097-554-7913　FAX 097-554-6177
cocsuishin@oita-u.ac.jp